

吸血鬼になって転生!?

ふわふわ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは吸血鬼になって緋弾のアリアの世界に転生したお話です
原作から見たい方は第十話からご覧ください

目次

様々な出来事に干渉

第一話	転生!?	1
第二話	執事は必要ですねぇ	4
第三話	そろそろアメリカへー!	8
第四話	独立戦争!	11
第五話	いざ開国!	15
第六話	いざ開国! 2	18
第七話	シャーロックホームズとジエームズモリアーティーと	22
オリ主		
第八話	シャーロックホームズとジエームズモリアーティーと	24
リ主 2		
東京武偵高校		
第九話	ホームズにお願い!	29
第十話	東京武偵高校入学!	33
第十一話	なんなんだ!	43
第十二話	カレンについて…	49
第十三話	バスジャック	56
第十四話	ハイジャック①	63
第十五話	ハイジャック②	69
第十六話	ハイジャック③とカレンの暴走	83
第十七話	ボディガード	92
第十八話	お買い物	100

様々な出来事に干渉

第一話 転生!?

皆さんこんにちわ

ふわふわです

二回目投稿でまだまだ下手ですが優しく見守ってください
それではスタートです

ここはどこだ？

「ここは死と生の間じゃ」

!?誰だ

「わしは神じゃ」

「早速じゃがお主には転生をしてもらう。早速お主の願う力をやろう」

「ちなみに転生先は緋弾のエリアじゃ。じゃからそこで生きていけるような力にするんじゃよ」

おつ 緋弾のエリアなら原作すべて読んだばかりじゃん

でも死亡フラグ立ちまくってるじゃん

「だったら なんでも能力を作れるようにして、力は常人の100倍で限界を無くして、俺の姿を吸血鬼にして」

神「了解じゃ、転生先の時間はいつにする?」

「原作の1000年前ぐらいでルーマニアにお願い」

「了解じゃ」

「その扉をくぐったら転生完了じゃ」

「いろいろありがとう」

「フッフフ ちょっといじってみようかの」

知らない天井だ

周りを見ると自然がいつぱいだった

「おい、そこのお嬢さん」

？お嬢さん？

「君そんなところで何をしているの？」

「えーっと 観光です」

「おう そうか」

「気をつけるよ」

「ありがとうございます。」

(……………なんで女になってるの?)

…うーん少し違和感があるなあ

まあそのうち慣れるでしょ

それじゃあいろいろ能力を作ってみますか

少女能力創造中

最初は毎日力を倍にしていくようにしよーっと

時も止められるかな？

「ザ・ワールド」

周りが停止している

いつまで続けられるかな…

……………

二十四時間経過

…まだ止まっているんっただけど…

「そして時は動き出す」

時の流れが戻った

そしてさらにいろいろな力を創り試した。

空も飛べるようになった。

ヒルダみたいなグライダーのようなものではなく、ずっと飛び続け

ることもできる

「今日はこれぐらいにしよーっと」

っと気が付いた。

「家どうしよう」

「あっ作ればいいんだ」

少女能力使用中

「うわぁ 大きすぎたかも」

まあ いいよね

「ご飯は能力で出しました

「今日はもう寝よう」

次の日

「ふわあ」

「よく寝た〜」

と 外に出ると

「ぎゃああああ」

体が燃えている

「ああ 日光のこと忘れてたあ」

「すぐ能力で対処しよー」

「あつ 銀もついでに大丈夫なようにしよー」

……………コレ私最強になってない!!

死なないし 吸血鬼の弱点も克服したし……………

だったら世界を回っているものに干渉しよー

最初はアメリカだ

「ザ・ワールド」

「転移」

こうすることで周りの人に気づかれずに移動できるのだ

さあアメリカに来たけど

まだ独立をしていなかったのでもた独立前にこよー

じゃあ 強い人を仲間に加えよー

そしてイギリスへ転移した。

第二話 執事は必要ですねぇ

皆さんこんにちわ
ふわふわです

今回は執事を加えたりするために戦闘シーンがありますのでチート度がよくわかると思います。

では二話目行ってみましょう！

イギリスで

まずは強い人を探さないといけないなあ

「すみませーん、ここに強い人はいますか？」

「お嬢さん、君みたいな娘がここになんのようだい？」

「強い人を仲間にしたくてここに来ました」

「ここはコロシウムだよ」

「コロシウム？」

「ここでは殺し合いが行われているんだよ」

「この中にあったら強い人が見つかるかもしれないね」

「ありがとうございます！」

「気を付けるんだよ」

コロシウムかあ ちよつと観戦してみよーつと

ワアーワアーワアー

すごい人だなあ

ゴーーーーーン

ワアーーーーーー

うわあ びつくりしたあ

ドカツ バキイ

ちよつとすごいなあ

でも

あの人は一人だけ強いなあ

この人なら執事にいいかなあ？

ゴーーーーーゴーーーーーゴーーーーー

あつ、あの人が優勝したく

あの人に会いたいなあ

よし 後で会いに行こう

…………優勝した男…………

ああ こんな戦いつまらないなあ

俺は不老不死で魔術も使うから周りの人には化け物と言われてきた

俺は存在価値もないのか…………

いつそ死んでしまいたいのに…………

私視点

あつあの人だあ

「すみませーん」

「誰だ」

「私は カインと言います」

「君のようなお嬢さんがこんな私に何の用だ？」

「こんな私？」

男は自分のことについて話した

「どうだ、私は化け物だろ」

「いいえ」

「何っ？」

「あなたは化け物なんかじゃありませんよ」

「私はあなたを執事として仲間に加えようと思つてここに来たんです」

「はっ、君のような子に私は倒せないよ」

「だったらあなたを倒したら私の執事になってくれますか？」

「ああ、いいだろう。私も暇になったところだったから」

「フッフ、ではコロシウムに行きましょう」

「ああ、いいだろう」

コロシウム

「じゃあ

あなたは死なないのでですから勝利条件は降参したほうにしましょう」

「いいだろう」

「では始めましょう」

先制は男のほうだ

「これでおしまいだあ！」

ヒュッ

「どうやってよけた!？」

ヒュッヒュッ

何回やつても当たらない

「では次は私から行きますかね」

ヒュン

ドコオ

「グッ」

強い

「降参しませんか？」

「まだまだこれからだ」

「だったら私も少し本気を出しますかねえ」

「なんだと」

「この子は本気を出していなかったというのか

「これでおしまいです」

ジーーーーー

なんだこれは

「くらえーっ」

バーン

「降参だ」

やったあ

これであなたは私の執事ですよ
分かった

「それじゃあ行くこう」

はい

第三話 そろそろアメリカへー!

1770年

「そろそろアメリカへ行きますかね〜」

「了解です」

この数百年のうちに100人の部下を従えた

「では 私の周りに立ってください」

「では…転移!」

アメリカ……

「これは…」

「ひどいですね…」

このころアメリカはイギリスの植民地となって皆苦しい生活を強いられていた。

…… 「じゃあアメリカのトップになる人を探しましょう」

「じゃあ私は一人で行動しますね」

「なっ! お嬢様一人で行動されるのですか!」

「そうですよ危ないですよ!」

「むー この中で私が一番年上なのにな〜」

「お嬢様が年長なのは知っていますがお嬢様は容姿が幼いので誰かに連れ去られたら大変です!」

「うー わかったよー」

「じゃあ…アイギス お願いするね〜」

「了解です」

「では皆さんそれぞれ自由に行動してくださいーい!」

「了解です!」

「明日12時にここに集合ねー」

「御意に」

「では」

「………お嬢様どこへ向かわれるのですか?」

「うーん……独立を計画している人たちの所ですかね〜」

「独立……この状態でそんなことが出来るのでしょうか？」
「うーん ちよつとこの状態だと多分無理でしょうね」
「じゃあなぜそこへ？……まさか！」
「うん！そのまさかだよ」
「それは危険じゃないでしょうか？」
「まー あの技を使えば一瞬で終わるしね」
「あの技を使うのですか?! あれを使えば都市ごと全壊してしまうので
すよ!!」
「まー 手加減すれば被害は抑えられそうですしね」
「お嬢様の考えに背くつもりもありません」
「よかつた」
「君たちにつ反撃されたら私もちよつと大変だからね」
「私どもがあなたにそむくなどありえないことです」
「万が一私どもがあなたに歯向かって傷一つもつけられないでし
うがね」
「フフフそんなことはないでしょう」
「みんな強くなっているんだし」
「しかしお嬢様も毎日累乗的に強くなっておられます」
「私どもの成長とは次元が違うので…差は常に広がっています」
「まーそうかもね…着いたよ」
「お前たち誰だ？」
「もしかしてこの娘を攫ったとか？」
「滅相もない 私はお嬢様の下部ですよ」
「この娘のか？」
「はい。私はお嬢様に一生使えると決めた身ですので」
「お前は強そうに見えるが…この子は弱そうに見えるぞ」
「お前こんな子に仕えていいのか？」
「お嬢様は私なんかよりもずっと強いのですよ」
「私が10000人いようともお嬢様に傷をつけることなどできま
せんよ」

「なっ！」

「アイギス」

「私の話はよろしゅう」

「おー お前たち何してんだー？」

「ワシントン長官！」

「あなたがここのトップですねぇ」

「なんだい？」

「あなたは独立を考えていますね」

「そうだが なんでこんなところに居るんだ？」

「私は あなたの作戦に加わってみようと思ってきました」

「あなたの作戦では 独立のためには戦力が低すぎるんじゃないです

か？」

「確かにそうだが：君にその戦力になる力はあるのか？」

「安心してください。私一人で十分です」

「私を前線に連れて行ってください」

「そこまで言うなら君にかけてみよう」

「ありがとうございます」

「では明日朝9時にここで会おう」

「分かりました」

「これを一人で成功させたら君はアメリカの英雄となるだろう」

「それではまた明日」

.....

「まあ明日は頑張りましょう！」

「そんなに頑張らなくてもいい気がするんですけど」

「ではお休み」

第四話 独立戦争!

翌朝

「お嬢様起きてください」

「んー……もう10ぷん」

「そんなこと言っていないで今日は戦争の日ですよ」

「(。D。)ハッ!」

「そうだった」

「はっ」

「お嬢様の力をもつてすれば一瞬で終わらせられるのはわかっています
すがもう少し緊張感を持ってみてはいかがですか?」

「うん」

「まー今度考えてみるね」

「じゃあそろそろ行こー!」

「了解です」

………午前9時

「おはよーございます!」

「おう来たか」

「みんなこの子が今回の戦いに参加してくれるカインだ」

「皆さん初めましてカインと申します」

「「おーかわいいーな」」

「おいお前からこの子は容姿は幼いがとても強いそうぞ」

「それよりも時間がない」

「みんな準備はいいか?」

「「オーーーーー」」

「では目的地に向かう」

「カインついてこい」

「いえ、大丈夫ですよ」

「何?」

「私飛べるので車は必要ないですよ」

「二」「なんだってー……」

「そもそも私人間じゃありませんよ」

「私は吸血鬼です」

「ああ皆さん安心してください私は血を吸うことはあまりしないので」

「まさか君が人間じゃないなんて」

「まあそんなことはいいじゃないですか」

「早く行きましょ」

「そうだな」

「では出発」

……戦争前線

「長官、みんなをここから一キロは離してください」

「何でだい？」

「攻撃は手加減はもちろんするんですがそれでも周りは吹っ飛ぶと思うので」

「巻き添えになりたくなかったら離してください」

「了解だ」

「だが私はここに残るとするよ」

「これでもこの大戦の最高指揮官だからね」

「一応力はあるとおもうからね」

「分かりました」

「では1時間後に攻撃を開始します」

「了解だ」

「では」

(……………ほんとに一人でやるつもりか?)

我々が全勢力をかけたのに歯が立たなかった相手に……………

しかもその中には化け物のようなものもいたはずだが……………

……………1時間後

「長官 準備はいいですか？」

「ああ、全員避難させたからな」

「うーん でもまだ威力は同じ力でも上がるかな」

「あつああそうなるといいな」

「では戻りましょうか」

「ああ」

「お嬢様お疲れさまでした」

「そこまで疲れるようなことしなかったけどね」

「しかし今日はゆっくりと休んでください」

「分かったよ」

「……………アメリカ」

「今ここで朴立宣言を発表する」

「ウオオオおおおおお」

「わたしが初の大統領に」なる」

「ではこれで」

第五話 いざ開国!

……1853年

「ねーねーペリー」

「何でございましょうか?」

「そろそろアメリカもアジアに出てみよ〜!」

「そのためにはまず日本を開国させないと!ペリー日本に行つて開国させてきて」

「申し訳ございませんが、私にはそれがどこにあるかも分からないのです」

「ふーん……だったら私もついていくよ〜」

「カレン様自らお動きになられるなんて……私もついて参ります。すぐに軍艦の準備をさせます」

「出発は……一週間後で」

「承知いたしました。急ピッチで準備させます」

「よろしくね〜」

「では、下がつていいですよ」

「失礼いたします」

……早く原作始まらないかなあ……でももつと強くなつてからのほうがいいかなあ

まつ それでも先に玉藻さんに会えるかなあ

それじゃあ「全員集合してください」

ザツザツ

1000人の部下たちがここへ転移してくる音がする

「お嬢様いかがいたしました?」

「レイス、それはね〜……これから日本に遊び……おつと開国させに行くんですよ〜」

「二(いま遊びについて言おうとしてた……)二」

「まあ、そのためにみんなを呼んだんだけどね〜」

「お嬢様それでわたくしたちに頼みですか?」

「うん！私もペリーと一緒に日本に行くからみんなも一緒についてきて〜」

「二「お嬢様のためならどこへでも」」

「みんなありがとう！出発は一週間後です。みんな戻っていいですよ」

「二「失礼いたします」」

ふうー今日はどうしても疲れたなあ。今日はゆっくりと休もーっと。

……………一週間後

「皆さんおはようございます！」

「二「おはようございます！お嬢様」」

「今から日本に向かうよう。結構時間かかると思うからみんなしつかりと準備しておいてね〜」

「二「了解です！」」

「では各自自由に行ってください」

「失礼します」

はあー、やっと始まったなあ〜。

……………一週間後

「みんな集合してください！」

ザツザツ

「日本が見えてきたよ〜」

「まずあの狭くなっているところ（江戸）に向かってください。その後序列が下の方から船を下りてください。最後にペリー、私の順に降ります」

「二「はっ」」

「それでは行きましょう」

……………日本江戸幕府視点

（なんなんだあのとてつもなく大きい船は!!）

「これはマズいのではないでしょうか？」

「ああ確かにまズい」

「このままでは私たちは抵抗もできず負けてしまいます」

「いや待て、中から誰か出てくる。」

「っ！あれは一人一人がとてつもなく強い！私たちが10人でやつと互角といったところか」

（しかもそんな奴らは何百人もいるだと）

（っ！中からもつとヤバそうなやつが出てきた！あいつがトップなのか？出てきたやつらが頭を下げているとなるとそうなんだろう）

「えっっ？」

（なんだと！トップと思ったやつが頭を下げている…だと?!）

（一体どんな奴が出てくるんだ?!）

「皆さん頭を上げていいですよ」

（なん…だと…）

最後に出てきたのはなんと、とても幼い少女だったのから

（なんなんだあの子は?!一切強そうな感じがしないぞ）

（私たちはいったいどうしたらいいのだろうか?）

第六話 いざ開国！2

(なんなんだあの子は!!)

(化け物と錯覚するような奴らの中に居るといふ感じがしない女の子がこの中のリーダー!!)

こんなヤバそうなやつらがここまで忠実に従っているところを見ると危険な感じがするが、あの中なら一番話が通じそうな子だ。それなら……)

「いきなりここへきて何の用でしょうか？」

(できるだけ穏便に済ませたいからな……)

「えーっと、私たちの目的はですね…あなたたちにこの国を開国していただきたいと思つて来ました」

(この娘日本語がしゃべられるのか……)

「急にそんなことを言われても困ります。しかもこんな小さな国を開国させても意味などないのではないのでしょうか？」

「そんなことはないです。ここはアメリカが世界へ出るために不可欠な中継地点なので…なんと少しでも開国していただきたいのです」

「いきなり言われても困りますので、期間を下さい」

「うーん、こつちも急いでるから…一年後ここへまた来ます」

「分かりました。それまでにどうするかを検討をこちらのトップで考えておきます。もしかすると…拒否させていただく可能性もございます」

すると彼女はこちらへ歩いてきて私と武士だけに聞こえるように「良いお返事を待っていますよ。それと…：私たちも武力で従わせることはできるだけしたくありませんからねえ」

ジツツツツツツツツ

つとその場の誰をも凍り付かせるような殺気を放った。

「「「ツツツ…」」」

つと彼女の部下も怖気づいているのが見えた…

(ありえんだろこんなの一！こんなのに抵抗したりしたら一瞬で殺られる！)

つとこの場の誰もがそう感じたであろう。中には失神してしまった者もいる。

「どうかしましたか？ 私はほんのすこーすこーしだけ気配を出しただけですが…」

「お、お嬢様お言葉ですが殺気を出しすぎでございます」

「あつ、ごつめーん、ちよつと相手の人に真剣に考えてもらうためにねっー！」

「それでは私たちはこれで失礼しますね。それでは皆さん行きますよ」

全員移動中

「お嬢様、前よりもさらに強くなられていますね。今では0・1パーセントの力でふおれほどの攻撃力が出るのかも想像もできません」

「うーん私にもどれほどの攻撃力が出るか分からないですよ。…でも10パーセントぐらい出せば地球なら全壊させられると思うよ」

「「なっつっ」」

「それでも毎日強くなり続けていますけどね。皆さんも頑張つて力をつけてくださいね！いつでも相手になりますよ。それにしても1年後楽しみですね。それじゃあ私はこれで」

「お休みなさいませ」

……………1年後

「やつと日本へ行ける！じゃあみんな出発しよう！」

「「はっ」」

(悲しい結果にならないといいけど…)

そのころ日本で……

「皆の者今日は外国から人が来る。くれぐれも手を出さないようにしてくれ。特にこれから来る中の一番幼い子には絶対に手を出すな！」

「何ですか？もし戦いになればその子を人質にもできるんじゃないですか？」

「いいや。その子はその中で一番強いと思う。一般人なんかは瞬殺されてしまう。武士だとしても絶対に手を出すな！」

「「はっ」」

「御屋形様！」

「どうした？」

「黒船がやってまいりました」

「うむ。行くぞ皆の者」

「はっ」

……港では多くの野次が黒船を見ていた。ほとんどの人が初めて見る異国人だから不思議がっていた。

つと、黒船の中から強そうな男たちが出てきた。

ざわわわ

ほとんどの者がその殺気に怖気づいていた。

ざわわわわ

さらに後半になってくると出てくる者もさらに強そうになってきている。

(つー前よりも全員強くなっている!!)

ざわわわわ……はっ？

つと聴衆は思っただろう。

なぜなら最後に出てきたのが幼女なんだから。

「御屋形様、あのものが夫も注意しなければならぬものですか？見るからに私たちでも勝てそうなんですけど……」

「いやあの子は気配を隠しておる。絶対に誰も手出しせんように見張っておいてくれ」

「はっ」

つと整列していた男たちが2つに分かれた。

その間を悠々と歩くのはなんと幼女だった。しかし男たちは皆頭を下げている。

「おい、あの子超々可愛くないか？」

「おうそうだな、誘拐したいなーギヒヒ」

「おいお前たち何を考えている。」

「っー役人かよ。何をって、あの子を攫おうかなーって考えていたのですよ」

「それはやめておいたほうが良いぞ。お前たちが死にたくなかったら

な。

あれを見てみる。あんなヤバそうなやつらがあの子を敬っている。もし攫ったりなんてしたら……どうなっても知らないぞ」

「ひっ！」

「分かったならそんなことは考えるな」

……カレンside

「うわー！前よりもたくさんの方がいるよ。それじゃあ行こうかな」

……全員降りた後

「今日は1年前の返答を聞きに来ました。そちらの回答はいかがですか？」

「もちろん開国いたします。」

「そう…よかったです！。それでは今からそちらの屋敷で契約と行きましょう！」

「はい」

……契約後

「それでは、ありがとうございました」

「こちらこそ」

「では、私たちはここに残らせていただこうと思います。」

「何？」

「あつ心配しなくても大丈夫です。この人たちは自分で何とかできま

すから」

「そうか わかった」

「では…皆さん解散！」

「はっ！」

よかった〜無事開国させられた〜！

次はシャーロックホームズでも探しに行こうかな〜

第七話 シャーロックホームズとジエームズモリアーティーとオリ主

1914年

「おそらくもうすぐ世界大戦がはじまると思うんだ」

「世界大戦ですか？」

「うん、でもそこには…シャーロックホームズとジエームズモリアーティーさんが絡んでると思うんだ。だから…ちよつと見に行こうかな…って思っ」

「しかしどこにいるのかお分かりになられているのですか？」

「うーん…よくわからないから全力で全世界をサーチするからちよつと待ってね」

「分かりました。」

「それでは…はあっ！」

「っ！」

お嬢様が力を入れると彼女の体からとんでもない量の妖力が放出された。

周りの木や建物、さらには地面までもが悲鳴を上げるように割れていく。

一分後…上空からカレンが

「見つけた〜！」

「お、お嬢様、とんでもないことに周りになっていますよ」

「ん？わあ〜やっちゃった〜！でも…ん！」

「何をされたのですか？」

「ん…簡単に言う…この時間を止めてさっきの壊れる前の時間を後から追いつかせてさらに追い抜かして時間を動かすことで何もなかったようになるってことだよ」

「なんだかんでもないことをされているようで…」

「まあ〜そんなことよりも今から転移するよ。行くのは私とアイギスだけで十分」

「分かりました。」

「じゃあ今回は私が転移させるね〜」

「分かりました」

「じゃあ行くよ〜…転移!」

(お嬢様の移動は私たちとは違います。私たちは言ったことのある場所へ座標を開くことしかできないが、お嬢様は空間や結界を捻じ曲げて開けているのでとても静かに聞こえるのです。)

「着いたよ〜」

「君たちは誰だい?」

　　と若い男の人が話しかけてきた。その正面にはもう一人若い男の人が立っていた。

「私はカレンと申します。以後お見知りおきを。」

　　と、私が名前を言うと、

「っ!」

　　と二人が警戒心を上げたことが分かった。

「あなたたちは…:言うまでもないですね。シャーロックホームズさんとジエームズモリアーティーさんですね」

「何で私たちの名前を知っているんだ(い)?」

「それは…君たちはとても有名ですからねえ。私の耳にも入ってくるんですよ〜」

「それであなたのような方がこんなところへなぜ?」

「それはですね、あなたたち今から戦闘をしようとしていたでしょう? 私はそれを見に来ただけです。どうぞ続きを」

「モリアーティー君、ここは一時休戦としないかい?今の私たちが彼女に到底及ばない。ここは二人で組んで彼女と戦ってみないかい?」

「それは良い考えだ。私も世界で一番強い方と戦ってみたいところだ」

「それではお二人で私と戦うんですね。でも…:負けませんよ〜」
と戦いの火蓋は落とされた。

第八話 シャーロックホームズとジエームズモリアーティーとオリ主2

シャーロックside

(なんなんだこの子は?!急に私とモリアーティー君の間に現れた。これは僕の推理を覆したということだ。どうやって現れた?)

というシャーロックの考えは彼女の言葉によってすべて解決した。

「私はカレンと申します以後お見知りおきを」

(っ!この子が伝説の吸血鬼と言われた子か!私もこの子の情報は持っているがそれも一部分しかない。さらにこの子は一撃でアメリカの独立戦争を終わらせたのだ。っ!この子の目的は何なんだ?)

「なぜあなたのような方がこんなところへ?」

(回答次第では死を覚悟しなければならぬだろう。)

「それはですね、あなたたち今から戦闘をしようとしていたでしょう? 私はそれを見に來ただけです。どうぞ続きを」

(なぜ私たちが戦うのを知っていたんだ?しかし最悪の答えは避けられたから良いか。)

だが私たちの戦うところを見た後に戦うことになってしまったら確実に負ける……それなら)

「モリアーティー君、ここは一時休戦としないかい?今の私たちでは彼女に到底及ばない。ここは二人で組んで彼女と戦って見ないかい?」

(頭の良い君のことだ私の意図は汲めるだろう)

「それは良い考えだ。私も世界で一番強い方と戦ってみたいところだ」

(さすがはモリアーティー君、確かにどこまでこの子に通じるかも確かめてみたい)

「それではお二人で私と戦うんですね。でも……負けませんよ」

(まずは彼女の動きを見ながら戦うことにしよう)

「モリアーティー君、君は私の左側で、まずは相手の動きを見ながら戦

おう。」

「ああ、しかし一瞬でも気を抜いたら殺られるぞ」

「分かっているさ、まずは銃で牽制してみよう。」

バンバンバン

「遅いですよ。こんなものでは当たりません。三分は攻撃をしないであげます。せいぜい当ててみてくださいさいね」

(攻撃しないでと?!なめるな)

「シャーロック、あの子は攻撃をしないと云っていた。その間守ることとは考えずに全力で攻めるぞ！お前、被弾を持っているだろう。その力も使うんだ！」

「了解だよ、しかし私もこの力は実はまだ完璧には使いこなせてないのだよ」

「だが無いよりはマシだろう」

「では行くぞ」

(モリアーティー君は全力で全範囲に銃弾を展開している。さすがにこれは避けられないだろう。その間に僕はレーザーの準備をしないといけない。)

しかし

「うーん、結構いい攻撃だけど穴があるよ」

「どこだそんなはずはないぞ」

「残念ながら私は吸血鬼です。ブラドさんやヒルダさんとはレベルが違うんですよ。本物は飛べるんですよ」

「なっ！」

「しか飛べるだけではないんですよ。私の飛ぶ速度は音速なんて余裕で超えちゃうんですよ。即ち、あなたの銃弾は全て無駄だったという事です」

「クソっ！」

「大丈夫だよモリアーティー君、私もレーザーの準備ができたところだよ。私の視界内に入れば必ず彼女に当たるはずだよ。」

「そうか、しかしあの速度に当てられるのか？」

「問題ないよ、これは高速で飛ぶから彼女に当てられるはずさ」

「そうか、私は彼女の動きを全力で牽制する」

「頼んだよ」

「レーザーですか？これはちよつとまずいですね。じゃあ私も止まります」

「さすがのあなたでもこれは止められないはずだよ」

「シャーロック、あの子レーザーだということを知っているぞ。これだと止める方法を知っているかもしれないぞー」

「大丈夫だよたとえ止めたとしてもすぐには動けないはずだよ」

「しかし止まったというところには少し気になるな」

「私が止まった理由ですはね？私の全力の防御をここまで頑張った君たちに見せてあげようと思つてね。いい攻撃だったら防御方法を教えてあげてもいいですよー」

「それはうれしいな。君の防御は興味があるからな」

「私もその技を身につけたいところだ」

「じゃあ行きますよ？はあああ！」

彼女が気合を入れると今までとは桁違いの妖力が放出された。

「っ！」

（ありえない、こんな力があるなんて！）

「っ！シャーロック！撃て！」

「防いでみろー！」

つとシャーロックの瞳から高速のレーザーが放たれた。

『クーリアンセ！』

『永遠第四加護』

レーザーと盾が衝突して光の通ったところは地面が抉れたりしている

しかし

「っ！」

「なかなか良い攻撃ですね。十枚のうち三枚突破されたことは驚きですー」

（あの攻撃をしても半分も突破できないとは…）

「じゃあ……一撃だけ行きますねー」

(あの攻撃を防いだ力で攻撃をされるとは…私もここまでか……)
「あつ、大丈夫ですよく死なないようにコントロールしますから。では……天撃!」

ズガアアアン

つと一瞬のうちに周りは壊滅していた

(こんな攻撃を自分を狙って撃ったなら……)

「でもこれでも全力の0.1%も出でいませんけどね」

(なんだって?! そんな……じゃあ100%出したらどうなってしまうんだろう)

「今全力でやったらどうなるんだって思ったでしょ。多分ですけど今なら8%で地球は壊滅してしまうと思うよ。まあそんなことはしないけどね〜!」

(8%で壊滅だつて?! そんなでたらめな!)

「あとシャーロックさんあなたにはこれからお願いをすることもあると思うからその時はよろしくね〜!」

「僕にお願いをすることがあるとは思いますがその時はお受けしましょう」

「ありがとうございます! あつ、さっきの防御の方法を教えるね〜」

少女講義中

「ありがとうございます、これはとても使えるよ」

「私からも礼を言おう」

「どういたしまして。シャーロックさんが使った力……実は私も緋弾使えるんだ〜! これは極秘だよ〜」

(緋弾も使えるとは……)

「それじゃあ私はこれで、」

「そういえばどうやってここへ来たんだい?」

「それはね〜空間をこじ開けてここに来たんだ〜」
(めちやくちやだな〜)

「呼び止めてすまない。またいつでも声をかけてくれたまえ」

「ありがとう! それじゃあまたね〜」

「行ってしまったな」

「ああ行ってしまった。とんだ化け物だったな」
「そうだと思うよ」

しかしこのときヨーロッパではサラエボ事件が起きて第一次世界大戦が始まってしまっていたのは別の話

「お嬢様お疲れさまでした。」

「うん、今日はちよつと疲れたから船まで連れて行って〜」

「分かりました。失礼します」

お嬢様はとても軽くあんな力があるようには思えない小さな女の子だ

「スースー」

年相応の女の子のようだった

(お嬢様の目的は何なんだろうか)

アイギスはそんなお嬢様を見ながら考えていた

東京武偵高校

第九話 ホームズにお願い！

2009年（原作開始時期）

海上の上を一人の少女が飛んでいた。少女は下を向いていたが突然海に攻撃をした。

すると 海が割れていった。

海の中から原潜が上がってきた。

青年が船の中から出てきた。

「カレン君、この呼び方はやめてくれないか。と前にも言ったはずだったと思うが…」

「あつ、ごめくん。移動がめんどくさかったからつい…：今度からはちゃんと転移するから…ねっ?」

「はあくまあそういうってでもまたやるんだろう?」

「えへへくそうなんだー。ってそうじゃなくて今日はちゃんとした依頼で呼んだんだよ」

「まあ、そんなことだと思っただよ。さあ中にお入りください」

ここは伊・Uと呼ばれる国家機密の組織だ。ここでは超人を育成する学校としているが実際は、無法者の巣窟となっているのだ。

この青年はこのトップで教授と呼ばれていて一番強い。その名はシャーロックホームズだ。

しかしこの中の者たちは教授が負けるところを見たことなどないと言っているが実際正面に立っている少女に完敗を喫している。そのためこの子は伊・Uの中からも狙われてもいるのだ。

「今、この船に乗っている中でシャーロックの次に強い人はだあれ?」

「うん、おそらくカナ君だろう。」

「それってもしかして遠山金二ですか?」

「ご名答。さすがの情報力だ。」

「あの人って女装しているときにβエンドルフィンが分泌されること

でHSSになることが出来る特異体質ですよ〜」

「さすがだね。彼はこの組織を壊滅させようよ……どうしたんだいカレン君?」

「……フフ女装していて私よりも女性らしい……これは死刑だ!」

「カ、カレン君、なんだかとても怖い顔しているよ」

「おつとうっかり素が出てましたね〜失礼しました。後で彼に会わせてくださいね〜」

「くれぐれも殺さないようにしてくれたまえ。それはそうと今日の依頼は何だい? 君ほどの方が私に依頼とは非常に興味深い。

「それはですね〜私東京武偵高校に通いたいなくって思っつて。書類を作っつて欲しいんだけどめんどくさくて〜。あなたなら完璧なものをすぐに作れると思っつてね〜」

「めんどくさいからっつて私に依頼かい。だが良いだろう完璧なものを作っつてみせるよ!」

「ありがとう!」

(しかしこんな時にカレン君が東京武偵高校に……もうすぐ私の緋色の研究があるのだが、そこで向こうの子たちに加勢されては確実に負ける。生徒をその時は最大まで呼んでおくとしよう)

「それじゃあさっきの通りカナ君に会わせるとしよう。くれぐれも殺さないでくれたまえ」

「分かってますよ〜。たとえ殺しても蘇られることが出来るので大丈夫ですよ〜」

……訓練室

カナside

(教授が私をこんなところに呼んで何かしら?まさか計画がばれてしまったのかしら?いや、さっき教授は「君と会いたいと言っつている子がいる」と言っつていたからその線はないでしょう。しかし誰かしら私は向こうの世界とは縁を切ったはずなんだけど……)

「おつカナ君ちゃんと時間どうりに来てくれたね。紳士淑女として時間ルーズなのはよくないと思っつてね。彼女がダラダラしていたか

ら頑張つて連れてきたんだ」

(教授が頑張らないといけないなんて：相当な駄々っ子かしら?)

「さあカナ君の所まで来たよ」

「うん? あっ着いたんだ。ありがとう!」

「あなたが教授の言っていた私に会いたいといった子ですか?」

(よかった、小さい子なら戦闘などにはならないと思うからね)

というカナの考えは少女が振り向いた時から薄れていった

「はい、そうですよ」

(っ! この子ものすごく強い力を持っている。でもどうしてこんな子が教授といたのかしら?)

「あつ始めまして私はカレンと申します」

(っ! カレンですって?! それは伝説、神、悪魔と言われた吸血鬼じゃない! そんな子が私に会いたいなんてどうゆうことかしら)

カナはいたって平常な顔をしていたが内心とても焦っていた

「私はカナですよろしくね」

「早速ですがカナさん。あなたは……死刑です!」

(なっ! 私はこの子に接点なんてなかったのにどうして!!)

「なっ、何で私を殺そうとしているの?」

「あなたは、女装してるのにく私よりもずっと女性らしいじゃないですかあ! 私なんてずーっとこんな姿で(っ)口グスン」

(これは私に嫉妬してるだけかしら、それなら大丈夫かしらね)

「そんなことはほつといてあなたには弟さんがいますね?」

「ええいるわ」

(なぜ金二が話に出るのかしら)

「私はこれから東京武偵高校に入学するんですよ! だから教えてあげようと思っただけ」

(そんな……こんな化け物が入ったら金二が……)

「ああ大丈夫安心してください。私は彼を殺す予定はないので」

「そ……う……そうなのね、私の弟をくれぐれもよろしくね」

「はい! 大丈夫ですよ。あなたと戦おうかと思いましたが今はやめおきます」

「そう、じゃあまた今度ね」

「はい、また…もうすぐですがね」

「？」

「それじゃあシャーロック、あの件よろしくね。私の居場所ぐらい推理できるよね」

「ああ、了解した。その場所を送るよ」

「ありがとう、では私はこれで。またね」

ぐにやあ

空間がねじ曲げられて彼女が入る空間が出来上がった。

彼女はそこから異空間を通して去っていった

「教授、あなたなら彼女にどれほど対抗できますか？」

「対抗？ありえない。100年ほど前でも傷一つつけられなかったものだから今も全くの弱者だよ」

（教授が傷一つもつけられないなんて…これは手に負えないかしらね）

「それじゃあ僕もここで失礼させてもらうよ」

……日本

一週間後

「お嬢様お手紙が届いています」

「あつありがとう！差出人は…うん！シャーロックだね…うん！ちゃんとできてるね…さすが！アイギス、これからは私一人で満喫するから呼んだとき以外は手出ししないでね」

「分かりました。もしかしてお嬢様の目的はコレだったのですか？」

「そうだよ！」

（やっぱりですか。こんなにもお嬢様がはしゃいでいらっしやるのは初めて見ました）

「それじゃあお嬢様、存分にお楽しみください」

「うん！ありがとう！それじゃあ私は行くね」

「はい。」

楽しみだなく

第十話 東京武偵高校入学!

ついに来ましたよ東京武偵高!

ああ〜ようやくここにこれたー!

じゃあ最初は教務課に行かないとね〜

「あの〜すみません教務課ってどこですか?」

「ん?あんなところに何の用だ?」

ぶつきらぼうな話し方の男の子にこえをかけた。

「今日ここに転校してきたカレンです。よろしくね〜!」

「ああ、よろしく。遠山金二だ」

(この人が遠山金二君ですか〜:ちよつとからかつてみましょう)

「(ㄥㄥ)グスン」

「おい どうした?」

「教務課の位置が分からないので連れて行ってくれませんか?」

「あつ、ああいいだろう」

「ありがとうございます!ニコツ」

「っ!行くぞ:」

金二視点

ああ〜なんなんだ今日は、

今俺は神崎・H・アリアから逃げてきたところだ。ほんとに女つてのは何なんだよ。

と 金二がゲンナリしながら寮へ帰っていく途中

「あの〜すみません教務課ってどこですか?」

一人の小さな少女が声をかけてきた。

「ん?あんなところに何の用だ?」

(あんな危険地帯に何の用だ?)

少女は名前を名乗った

「今日ここに転校してきたカレンです。よろしくね〜!」

「ああ、よろしく。遠山金二だ」

「グスン」

少女が泣いている

「おい どうした？」

「こんなところを誰かに見られたら…」

「教務課の位置が分からないので連れて行ってくれませんか？」

「あつ、ああいいだろう」

「ありがとうございます！ニコッ」

（なっ！可愛い。いや…こんなところをでヒスるわけにはいかない。）なので俺は

「っ！行くぞ…」

「そういえばカレンってなんで今日から転校してきたんだ？」

（この子の容姿からするとインターンかな）

「いや、一般中学から転校ですよあつ、ちなみにこんな容姿ですが高校二年生です」

（なんだと…なんで俺の周りにはこんな体形の子ばかりなんだ…このままだと変な噂をさらに流されかねない）

「金二君今失礼なこと考えなかった？」

「いや、考えてない」

（どっかの誰かさんと同じで勘がいいな。やった、やっと着いた）

「…着いたぞ」

「ありがとうございます！ついてきてくれませんか？」

「残念だが用がないものがここに入ってはいけないんだ」

「そうですか、ありがとうございます！」

「ああ、頑張れよ」

（死なないようにな）

（ぶつきらぼうだったけどいい人だったな）

「じゃあ 失礼しまーす」

「ん？なんだお前見ない顔だな。」

（うわあアイギスの100分の一くらい怖いなあ）

「あのお転校してきたカレンです」

「ああ〜お前だったか。あたしは蘭豹だ。それにしても般中から今転校してくるなんてなかなかだなお前。しかもあたしを見てビビッて

ないとは相当肝っ玉座ってるな」

「いやあとても怖いですよ〜」

　　つと少女は微笑をしている

「っ！お前のランク考査は明日や！まあせいぜい頑張れや」

「ありがとうございます！」

「おう、もう帰っていいぞ。後お前のクラスは2年A組だ」

「分かりました。失礼します」

蘭豹 side

今日一般中学から転校生が来る情報を持っていた。

名前を見たときに驚愕した。名前には「カレン」と書かれていたのだから

(カレンって伝説の吸血鬼と同じ名前：いやっ考えすぎか)

「失礼しまーす」

少女が入ってきた。

(これは人違いだな。さすがにそんなのが入ってくるわけがないよな)

「ああ〜お前だったか。あたしは蘭豹だ。それにしても般中から今転校してくるなんてなかなかだなお前。しかもあたしを見てビビッてないとは相当肝っ玉座ってるな」

(少女はあたしに恐怖が全くないように見える)

「いやあとても怖いですよ〜」

　　つと少女は微笑をしている

(いやこれは演技だ。あたしなんて全く問題ないような顔をしている)

「っ！お前のランク考査は明日や！まあせいぜい頑張れや」

(少女を見て感じたことは恐怖だ)

「ありがとうございます！」

「おう、もう帰っていいぞ。後お前のクラスは2年A組だ」

「分かりました。失礼します」

　　これはあたしがランク考査をしなければならぬ

と 蘭豹は思いながら酒を飲んでいった。

…次の日

「ふわあく眠たーいけど行かないと」

私は武偵高の制服を着て家を出発した。

二年生の廊下

「あなたがカレンさんですか？」

「はい、そうですよ。」

「私は二年A組の教師の高天原ゆとりです」

「よろしくお願ひします！」

（この人ブラッディーゆとり 血塗れゆとりと呼ばれていた人ですよね、ひとつて相当変わるんですね）

「じゃあちよつとサプライズつてことでここで待つてね」

「分かりました」

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った

「はい皆さん席についてください。今日は新しい転校生が来ましたよ」

ざわわ

教室がざわついた

「では入ってきてください」

ざわわ

またも教室がざわついた

「初めましてカレンと言いますこれからよろしくね！」

ウオオオオおおお

男子たちが騒いでいる。

キヤーー可愛い

女子も黄色い声を上げている。

「皆さんカレンさんにいろいろ教えてあげてくださいね」

「はーーーーーい」

「それじゃあカレンさんに質問がある人は手を挙げてください」
「はい。じゃあ、武偵ランクは？」

「まだ決まっていますませんが今日ランク考査だと聞きました」
「じゃあ出身はどこ？」

「イギリスだよ」

「じゃあスリーサイズは？」

「女子だけの時に教えてあげます」

「はいはいーつぎはー……」

つとHR全て使って質問をされた。

「じゃあカレンさんの席はー」

（あつ昨日の金二君だ。それじゃあからかてみよーつと）

私は金二君を指して

「私あの男の子の隣がいいです」

教室内が絶叫した

「何で金二ばっかなんだよ！」

「俺にもわからねえよ！」

「あらあら最近の子は積極的ねえーじゃあ隣の子変わってくださいか
？」

「はい先生！俺転校生さんと交代しますよ」

「ありがとう、にこっ」

「二可愛いく」

「それじゃあ授業を始めますね」

……

金二side

「私あの男の子の隣がいいです」

なんで俺なんだ！

金二は内心絶叫していた

「何で金二ばっかなんだよ！」

俺にもわからねえよ！

「あらあら最近の子は積極的ねえーじゃあ隣の子変わってくださいか
？」

「はい先生！俺転校生さんと交代しますよ」

「ありがとうございます！」

「それじゃあ授業を始めますね〜」

おれの悩みの種は増えていった

……キーンコーンカーンコーン

授業が終わった

「金二君昨日ぶりだね〜」

「ああそうだな」

「おい金二……お前覚悟はいいか？」

「なんなんだよお前ら」

「何で金二ばかり女がよっていくんだー！」

「ということでお前は殺す！」

と金二は追いかけていった。

……五時間目

この学校には12の学科がある。

特に有名なのは強襲科

ここは犯罪者を捕まえる者を育成する学科で日常的に激しい戦闘訓練があり、犯罪組織のアジトに突入する依頼が来るなど、他の学科と比較して、危険度は高い。卒業時の生存率が97.1パーセントと、約3人の生徒が死亡するため、「明日無き学科」とも呼ばれる。

次が狙撃科（スナイプ）

狙撃、観測といった遠隔からの戦闘支援を習得する学科。南郷が主任。狙撃は極めて高い集中力を必要とするため、性格的な向き・不向きに左右される傾向が強く、適性のある強襲科の生徒に転科をうながすこともある。

などなど多くの学科がある。

カレンはその強襲科に来ていた。

ランク考査と強襲科志望のためここへ来ている。

「おう来たかカレン。こっちへ〜い」

「はい、先生」

多くの生徒がカレンを見に来るために強襲科の体育館は熱気に包まれている。

「では今からランク考査を行う。カレンこの銃を使ってあのターゲットに打ち込め。」

「あのく先生？私銃なら持っていますよ。」

そうして彼女が見せたのは

「ほうベレッタM92Fか遠山と同じ銃だな。」

「これで撃つてもいいですか？」

「良いだろう撃つてみる」

「では」

(金二君と同じ銃かあちよつと蘭豹先生を驚愕に陥れてやろう)

私は時間を止めてからターゲットの目、心臓、脳にそれぞれ二弾ずつ完璧に撃つてから時間を戻した

「「なっ！」」

全員が驚愕したのは的に急に当たったことではない。当たった場所なのだ

それは武偵法の9条を完全に無視した銃撃だったのから

「おい！もう一回撃つてみる」

「は〜ん」

またさつきと同じところに急に着弾していた

「「……………」」

体育館は静寂に包まれた

「おい神崎、今の見ただろ。お前あいつと戦え」

確かにアリアは強襲科のSランクだ。

Sランクはその道のプロと呼んでも差し支えない実力のAランクが束になっても敵わないほどの実力差がある。なお、Sランクの武偵には数に上限が存在する。

彼女なら対抗できるだろうという蘭豹の考えだった。

「分かりました。こいつの腐った根性を叩き直してやりますよ」

おおっ！

観客がまたも声援を上げた。

その中には金二もいたが彼は

(俺と同じ銃で9条破りをしているなんて…しかもそれを平然とした顔で！)

「おい神崎、今の見ただろ。お前あいつと戦え」

確かにアリアならほとんどの相手なら大丈夫だろう。だがあの銃撃は全く分からない。

これは危険なのではないのあろうか？という考えが金二の中を駆け巡った。

「分かりました。こいつの腐った根性を叩き直してやりますよ」

おおっ！

観客がまたも声援を上げた。

「それじゃあ…始め！」

蘭豹のM200の発砲音が始まった。

「あんた、一般中なのになんでそんな危険なことが出来るの!?!」

「まあ、銃を使ったことならありますよ」

パァン

「うっ」

急に5発もの銃弾がアリアの腕、足、腹部に当たった

「うーん、あなたは弱いですね。それじゃああなたの追っている敵にはかないませんよ」

「っ！なんでそんなことを知ってるのよ！それにアタシは弱くない！」

だめだアリアお前は今冷静じゃない。そんなんじゃ今俺たちが追っている敵にはかなわない。っと金二は内心想っていた

「じゃあ面白いものを見せてあげるよ。蘭豹先生、体育館壊れると思いますですがすぐに直すので許してください！」

「はあ？何を言ってるんだお前はあほか！それにこの体育館は絶対に壊れんから壊せるなら壊してみろ」

「じゃあ皆さん覚悟してくださいね…はあああ！」

彼女が気合を入れると今までとは桁違いの妖力が放出された。」

「っ！」

(ありえない、こんな力があるなんて！)

と、この全員が思っただろう。

中には失神しているものも多にいる。

蘭豹

(なんなんだこの女は！まさかあたしの考えどうりだったってことか！それならまずい！)

「なんなのよアンタ、アンタほんとに人間?」

「失礼な、私は人間ですよ。じゃあお終いです！天撃！」

「キャアーーーーー！」

「っ！神崎！」

体育館は全壊

「カレンお前何をやった！」

「ん？何もしてないですよ」

「んなあ！」

「えっ」

アリアは全くの無傷、体育館もさつきと同様に元通りだ。

「何かありましたか？」

「いやっ、今体育館全壊してなかったか?」

「えっ？知らないですよ。アリアさん続きをしましょう！」

「っ！降参よ」

「えっ？」

「あたしではアンタに勝てない。そんな気がしたの」

「残念です。もっとやりたかったのに」

「また今度やってあげるわ、」

「ありがとうございます！」にこっ

「っ！やっぱり可愛い」

みんな恐怖よりもかわいに行ってしまったようだ。

「おいカレンお前のランクは明日出るからな。全員解散！」

みんな自分のことを始めた。

蘭豹

（あいつはヤバすぎる。体育館を一撃で破壊するだど！それを一瞬で直すあと！神崎も部傷だど！ありえない！これは要検討だな）

翌日

カレン武偵ランクB

だが教務課のレポートには

「カレン、戦闘技術はSランク：いや、Rランクもを超えていると推測。しかし武偵法9条を悠々よ破る人格破綻者として、Bランクとする。」

また教務課は常に警戒を怠らないように～：と書かれていた

カレンside

あつ、コレやつちやつたパターンですね～

つと自分の行動を後悔していたカレンであった

第十一話　　なんなんだ！

次の日

「あーっ、まだ眠いっ！」

と時計を見ると

8時15分

と表示されていた

「うわああー！遅刻ー！」ピキキリ

「なんなのこんな時に！はい、もしもし？」

「おいカレン。蘭豹や」

「蘭豹先生？」

「お前今何しとる？今朝バスが乗っ取られた。武偵殺しの手口と同じや。お前何か知らんか？」

「知ってるも何も私は今絶賛お急ぎ中ですよ」

「何？どうゆうことや？」

「実は今起きたばかりで大急ぎで支度をしながら電話をしているので
す」

「……そうやったんか。しかしもし遅れたら……覚悟しとけよ？」

「わかりましたー！失礼します」ガチャ

「あいつではなかった」

「本当ですか？」

「ああ。あいつ思いつきり寝坊してやがった」

「は、はあ」

「まあこれで犯人が狭まったっちゆうことや」

「おい蘭ちゃん？」

「なんだ綴？」

「あいつ遅れてきたら私が尋問して良い？」

「ああ、いいぞ。こつてり絞りつくしてあの腐った根性を叩き直して
くれ。」

「はいよ」

「全く初日から寝坊とは良い度胸だなあ。強襲科でどうしごいてやろ

うか」

「あ、あのお蘭豹先生、綴先生？」

「なんや高原？」

「もしあの子が間に合ったらどうするつもりですか？」

「あほお、女子寮から何キロ離れてると思ってるんだ？もし間に合ったら超能…そうか！」

「もしあいつが本物のカレンだとしたら間に合うはずや」

「え〜尋問は〜？」

「おそらくなしや」

「はあ〜」

こちらはカレン

今私は大急ぎで支度をしています。理由は？聞くまでもないでしょう。寝坊ですよ！このままだとあの教務課に何されるか知ったものじゃないです！どうしようどうしよう！…はっ！超能力使えばいいんじゃないですかあ〜。何で私こんなことにきずかなかったのでしょうか？

「ザ・ワールド！」

私以外のものの時間が停止した。

……これでよしと

「転移！」

もちろん家の鍵は閉めましたよ！

えーつとここには誰もいな…いた！金次君だ〜！

そーつと後ろに…つて時間止まっていましたね。

というわけで

「金次君！」

「うおお！カレンどこから出てきた？」

「秘密ですよ〜つて金次君は何をしてるの？」

「見たら分かるだろ。寝坊したんだよ！」

わあ！私と同じだ〜！同類ってことで助けてあげようかな？

「金次君！私も寝坊だよ〜！」

「まじかよ。これは完全に終わったぞ。教務課に何されるか!？」

「はいっ、ここでチャンスです！私はここから学校に行っても間に合う方法があります！金次君はどうしますか？」

「もちろん間に合いたい！に決まっているだろ！」

「じゃあ取引しない？」

「取引だと？」

「うん！私が金次君を学校に間に合わせる代わりに私とパートナーにならない？」

「パートナーだと？」

「そうだよ！」

金次

(ここで誘いに乗れば学校に間に合うが、パートナーは……アリアに勝手にされているんだよな。だからここは)

「すまないカレン俺はもうパートナーがいるんだ」

「そうなの!？」

「ああ」

「うーん……分かった。じゃあこうしよう！金次君は私の依頼を一つ無期限で受けることとどうかな？」

(依頼一つだと？まあそれならいいか)

「分かった。依頼を一つ受ける。」

「ありがとう！じゃあ取引成立だね！じゃあ……今から起きることは絶対に誰にも言っちゃだめだよ！言ったら日本……いや、世界から抹殺されて殺されちゃうかもしれないから」

「あ、ああ分かった他言無用だ。」

「じゃあ私の手を握って？」

「なんでだよ!？」

「だってそれじゃないと間に合わないから」

「……わ、分かったよ」

ぎゅっ

金次

(やばいやばいこれはヒステリアモード化の危機だ！でもカレンの手はとても柔らかいな、って何を考えてるんだ俺は!)

「じゃあ行くよ〜！ザ・ワールド！」

ピタリ

周りのもの金二君と私以外の時間がすべて停止している

金次

「じゃあ行くよ〜！ザ・ワールド！」

ピタリ

俺とカレン以外のすべてのものの時間が停止している。見た感じ
白黒画像のようだ

（なんなんだこれは！すべて止まっているだど!?…まさか昨日のあの
銃撃はこれを使っているのか!）

「な、なあカレン?」

「どうしたの?」

「これって時間止まっているよな?」

「うん!止まっているよ。だから私の手は離さないでね?離したらこ
の世界から離れて学校間に合わないからね?」

「ああ分かった」

「じゃあ行く〜!」

「歩いていくのかよ!」

「えっ?歩くの嫌だった?」

「結局歩くのかと思ってな」

（しかも学校着くまで手をつながないといけないと思っつてな）

「うーん…ちよつと危ないけど…これも絶対に誰にも言っちゃいけな
いよ…これは言ったら国から抹殺されちゃうかもしれないからね」

「あつああ分かった」

「じゃあ怖がらないでね…はあっ!」

彼女が力を入れると周りを押しつぶしそうなあ圧力を放出してい
る

（なんなんだこの力は!?生きていたころの父さんなんかよりもずっと
強い!…何!）

金次が見たものは彼女の背中から羽が生えているというところだ
「おい、カレンこれは何だ!」

「ああ、だからこれは誰にも言っちゃいけないからね？金次君の為を言ってるから死にたいなら別だけど」

「いや言わないよ」

「そっか？よかった！…それじゃあ行こう！」

「おいっちよつとまてて…うわあ！」

一人は空を飛んでいるのだ

(空を飛べるなんて聞いてないぞ！だがこんな景色初めて見た！)

「もつと飛ばすよ！」

「ぎやあああ！」

「はい着いたよ」

「なんだって！」

「一秒かかってないぞ」

「うん、音速余裕で超えたからかな？」

「音速って…ヤバすぎだろ！」

「まあいいじゃん一瞬で終わったんだから」

「確かにそうだが」

「じゃあ人がいないところで時間を戻すから人がいないところを探そう！」

「それならここはどうだ？」

「おっ！いいね、教室からも近いしここにしよう！じゃあ時よ動け！」

ざわわわ

多くの生徒たちの声が聞こえる。

「じゃあいこう！」

「ああそうだな」

(それにしてもこんなこともう経験できないだろうな)

「金次君？」

「どうした？」

「そろそろ手を離さないとみんなに何を言われるか分からないよ！」

「おっそうだな」

恐怖でカレンの手を強く握ってしまっていたのだ

(しかしこんな長時間女子と手を握ることもこれからのいな)
と思いつながら金次とカレンは教室へ入っていった

教務課

「蘭豹先生！綴先生！」

「どうした？」

「どうしたの〜？」

「今日カレンさんは学校に間に合いました。」

「なんだと！やはりか」

「蘭ちゃん尋問良い？」

「おういいぞ」

「ちよつと待つてください！」

「なんや？」

「実は急に現れたのがカレンさんだけではなかったのです。遠山君も一緒に現れたんです」

「ほう、これは二人して寝坊か？」

「おそらくそうだと思います」

「分かった。これからは監視を怠るなよ！」

「二はい！」「」

第十二話 カレンについて…

無事学校に間に合ったカレンと金次だった。

金次 side

無事学校に間に合ったのは良かったがもう一つもんだいがある「キンジー！」

アリアだ。今の最大の問題はコイツなのだ。

「なんだアリア！俺はお前の顔なんて見たくない」

「なんですってバカキンジー！アンタ元強襲科Sランクだったでしょ！アンタ私とパーティーを組みなさい！って逃げないの！」バキユンバキユン

「ふう〜何とか男子トイレまで逃げ込めたな。おつ、そういえば理子に依頼をしていたんだったな。」

というわけで俺はアリア対策のために男子トイレからワイヤーを使って一階に下りて行った。

……………理子まだか？

「やつほ〜キー君！理子りんですー！」

やつと来やがった。なので

「おい遅いぞ理子！」

「ごつめ〜ん！理子お買い物してて遅れちゃった！」テヘペロ！

と理子は自分の頭をちっちゃくげんこつ…イラッ！

「それよりも理子、依頼したものは持ってきただろうな！」

「もちろんだよ！はいじゃあこつちも買ってきてつて言ったものちよーだーい！」

「ああ、これだ」

「うわあ!!『しろくろ』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だよお！」

ぴよんぴよんと兎のように跳ねながらぶんまわしているのはR15指定のギャルゲーだ。

なんとというか理子のこの容姿によって中学生に思われたんだろう。

アリアは小学生だな。と思っていたら

「あ…これとこれはいらぬ、理子はこういうの嫌いな」

「これは妹ゴス2と3だ。

「なんでだ？」

「これは作品を数字で表している嫌な呼び方。だからこれはいらない」

まあそういうものの考えなんだなと思っておこう。

「じゃあそれ以外はやるからアリアの情報を出せ」

「ーあーい！ー」

「そういえばキー君？」

「なんだ？」

「キー君はアリアのお尻に敷かれているの？彼女なんだったら自分で聞けばいいのに」

「彼女じゃねーよ！」

（大体あんなのが彼女だったら犯罪ものと思われるぞ）

「えー！彼女じゃないの？二人は完全にデキているって話だよ！アリアのファンクラブの男子たちも「金次殺す！」って言ってたよ！」

（もういいや、いろんな奴に狙われるのは今に始まったばかりじゃないからな）

「じゃあ…あいつの強襲科での評価を教えろ」

「えーつと、ランクはSだね。Sランクと言うと二年生でも片手に数えるぐらいしかないじゃない？」

確かに前に見たあいつの動きからすればSというのも納得できる。

「じゃあ…あいつの戦い方とかは？」

「それはね、関節技やボクシングとかなんでもありのバーリ：バリツウ…」

「バーリ・トワードか？」

「そうそうそれ！アリアはそれを全部使えるんだって！イギリスでは略してバリツって呼ぶんだって」

（体育館で投げられたことを思い出す。ヒステリアモードの俺を受け身で精一杯にするのは凄かった。）

「拳銃とナイフは天才の域だっつてどっちも二刀流なの。あの子両利きなんだよ！」

「それは知ってる」

「じゃあ…二つ名も知ってる？」

二つ名―豊富な実績を誇る武偵には自然と二つ名がつく。

アリアはもうそれを持っているのか

と俺が知らないという顔を見ると理子がニヤリと笑って

「双剣双銃のアリア」

カドラ…武偵用語では二丁拳銃ないし二刀流のことは、ダブルと呼ぶ

「笑っちゃうよね双剣双銃なんて」

「笑いどころが分からないのだが…まあいい。じゃあアリアの成績を知りたい。」

「これは凄いのがあるよ！まずはアリアは14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパで活動していたらしいんだけど…そこでも一回も犯罪者を逃がしたことがないんだって」

「逃がしたことが…ない？」

「そう。狙った相手を全員。しかも一回の強襲だけでね。しかも99回連続」

「なんだ…それ」

信じられない。99回連続だけでもすごいのに一発逮捕とは…そんな化け物に俺は追われているのか…

「あー、ほかには…体質とか？」

「うーんとね。アリアはお父さんがイギリス人のクォーターなんだよ」

どうりで髪も目も赤く、ぱっちりとした二重の目なんだな。そもそも名前も

「神崎・H・アリア」だしな

「で、イギリスのほうがH家でとーっても有名な一族なんだって！おばあちゃんは

デイムの称号をもらっているらしいし」

「デイム？」

「イギリスの王家が授与する称号だよ。叙勲された男性はサー。女性

はデyimなんだよ」

「……って、あいつ貴族かよ！」

「そう！でもアリアはそこはうまくいっていないようだよ。たしかにあの一族はね〜」

「教えろ！ゲームあげただろ！」

「理子は親の七光りとかは嫌だから自分でググってね〜！」

「俺、英語だめなんだよ」

「まー頑張れ！」

「…あつ！」

「なんだ？」

「そういえば理子にも分からなかったことがあるんだ」

「なんだ？」

理子が分からないとなるとなかなかのもので

「カレンちゃんのことなんだけどね」

カレン…今朝もほんとにチートな体験をしたばかりだ。しかもあの子は一般中学という。そんなことはありえないだろう

「ああ」

「理子も全力で調査したんだけど……まーまったく普通の情報しか出てこなかったんだよね〜」

「ああ」

「キー君何か知らない？」

「確かに知っている。」

「…知らない」

「今、間があつたよね？じゃあ知ってるんだ〜！理子に教えて？またなんでも依頼一回ただで受けてあげるからさ〜？」

「……それはできない」

「なんで〜？」

「あいつに言うなって言われた。」

「そんなの理子も秘密にしておけばいいじゃん！」

「いや、だめだ」

「そこまで言うなら…何かあるね？」

「これだけは言っておく。俺もあいつに言われただけだからそこまで信用していかないが…あいつのことを調べるのはやめろ!」
「なんで?」

「お前が日本から…いや世界から抹殺されると言っていた」
「ふーん? そうなんだ…まあ気をつけるよ」

「ああ」
「じゃあね〜!」 バシン

理子が俺の背中をたたこうとしたら空ぶって

ガチャ

「うお?」

「ごつめーん! 理子にいっぱい修理させて! 依頼人の持ち物壊したら理子の信用にかかわっちゃうから!」

「ああ、わかった」

「キンジ、他は?」

「いやない」

「じゃあね〜!」

理子 side

「カレンちゃんのことなんだけどね」

「ああ」

「理子も全力で調査したんだけど…:…まーったく普通の情報しか出てこなかったんだよね〜」

理子がこんなに全力で調査したのにあれしか出てこないということとはありえない!

あんなオルメスなんか相手にならないほどの力を持っているのに一般中学なんてありえない!

「ああ」

「キー君何か知らない?」

私はキンジの様子を見る

「…知らない」

これは知っているな。

「今、間があつたよね？じゃあ知ってるんだ！理子に教えて？またなんでも依頼一回ただで受けてあげるからさ？」

「……それはできない」

「なんで？」

話せない理由でもあるのだろうか

「あいつに言うなって言われた。」

「そんなの理子も秘密にしておけばいいじゃん！」

情報を手に入れておくことは重要だ。私の計画を台無しにする可能性があるからな

「いや、だめだ」

「そこまで言うなら……何かあるね？」

私はキンジにそう聞いて、キンジから返ってきた言葉に背筋が凍つた。

「これだけは言っておく。俺もあいつに言われただけだからそこまで信用していかないが……あいつのことを調べるのはやめろ！」

「なんで？」

「お前が日本から……いや世界から抹殺されると言っていた」

なん……だと！調べたら抹殺!?これは私の入っている伊・Uと同じレベルだということだ……後で教授に聞いてみよう

「ふーん？そうなんだ……まあ気をつけるよ」

私はキンジに冷や汗を見られないようにするために計画だけをしてさっさと戻ろうと思った。

金次 side

やはり理子も探っていたか。あの力は俺らなんかが太刀打ちできるようなものではないからな。今後は注意しながら生活していk「キンジー！」

ああ、見つかった。

「キンジアンタ何してたのよ！」

「考え事をしていた」

「バカキンジ！」

「意味わからねーよ！」

「まあいいわ、キンジ、どこ行くの？」

「ゲーセンだ」

「ゲーセン？」

「コイツはゲームセンターも知らないのか

「じゃあな、俺はそこへ行くからお前は帰れ」

「嫌！私もついていくわ！」

「なんでだよ！」

「アンタは私の奴隷なの！」

「知らねーよ！」

とこの後一悶着あったのだ

第十三話 バスジャック

金次 side

今日は昨日みたいに遅刻とか嫌だからな
だから今日は余裕を持って家を出た。がー
おかしい

俺がバス停についた時にはもう7時58分のバスが来ていて生徒
たちが押し合いへし合いして乗り込んでいる。このままだと乗れな
い！

「やったくー！のれたー！おう金次おはよう！」

武藤だ

いかんこれでは遅れるっ！

「乗せてくれ武藤！」

「お前はチャリで来いよ！」

「それはこの前壊されたんだよ！」

「まあ諦めろ、一時間目フケちまえよ！じゃあまた二時間目会おうぜ
！」バタン

無情にもバスのドアが閉められた。

とそこに

「うわあ！また遅刻だ〜！」

「カレン!？」

「あつ金次君おはよう！ってバス行っちゃってる！」

「そうなんだ。しかもあれは満員で乗れないぞ！」

「うー」

「カレンすまない！」

「何？」

「また昨日みたいに連れて行ってくれないか？貸し二つってことでい
いからさー」

「うーん：朝から力つかうのめんどくさい〜！」

「なんでだよ！お前も遅れるぞ！」

「まあ一回くらいいいんじゃない？」

「いいわけないだろ！」

「うーめんどくさい！」

「そこを何とか！」

「うー分かったよ…じゃあ貸し2ね！」

「ああ」

「じゃあ昨日みたいに手をつないで？」

若干抵抗があるがこれも自分のため！

「ああ」ぎゅっ

「じゃあ行こうか」

「ああそうしよ」ピクピク「なんだよ！」

「はいもしもし誰だ？」

「キンジアンタとここにいるのよ！」

「んー今察の前」

「アンタ何やってるのよ！」

「バスに乗れなかったんだよ！それに、そっちこそ何の用だ！」

「事件よ！」

「なんだって？」

「武偵高のバスがジャックされたわ！これが約束の事件一つよ！」

俺は昨日アリアと事件一つだけ解決するという約束をしまっ

たのだ

「ああ！分かったよ！」

「じゃあ強襲科に行つてc装備で女子寮の屋上に来て！」

「ああ」

「というわけでカレン…すまないが強襲科に連れて行ってくれないか？」

「ほーい分かったよ。じゃあもう一回握つて？」

「ああ」

「それじゃあ行くよー！」ザ・ワールド！」

ピタリ

またも俺とカレン以外のすべてのものの時間が停止している。二

回目でもこれはびっくりする。

「金二君なんか急いでるようだから昨日みたいに飛ばすけど良い？」

「ああいいぞ」

「じゃあ行くよ〜！…はあっ！」

彼女が力を入れると周りを押しつぶしそうなあ圧力を放出している

これは本当に心臓がつぶされそうだ

「しゅっぱーっ！」

ビュン！

「お、おい昨日よりも速くないか!？」

「もちろん!だって急いでるんでしょ?時間止まってるから関係ないけど」

「確かに焦っているからな。って何キロ出てんだよ!」

「うーん…ざっと時速5000キロくらい?」

「なんで俺たち死なないんだよ!」

「だって私が死なないように昨日も盾を張っているからだよ!」

「お、おう」

こんな世界はなかなか体験できないな。

「着いたよ〜」

「もうかよ!」

「そりやそうだよ」

「ああ、ありがとう」

「うん!頑張ってるね!」

「ああ」

「それじゃあ私は行くね〜!ザ・ワールド」

一瞬のうちにカレンが消えた。

これは戦闘になったら絶対敵対してはいけないな
と思っただ金次であった

女子寮屋上

「あれキンジ早いわね!それは良いことよ!」

「ああ」

「どうしたの?」

「朝からとんでもないことを体験したからな」

「まあそれについては聞かないわ。それよりもSランク三人よ」

「三人?」

見渡すと階段の近くにレキが体育座りしていた。

「レキ」

「……」

ああ、ヘッドフォンをしているからか。

なのでヘッドフォンを外して

「お前もアリアに呼ばれたのか?」

「はい」

抑揚のない声

「てゆうかお前なんの音楽を聴いてるんだよ?」

「音楽じゃありません。風です。」

「風?」

「はい」

レキはちよつと変わっている。

いや武偵高の生徒はみんな変わってるか。

と

「時間切れね。」

アリアが言った。

「もう一人ぐらいSランクが欲しかったけど任務らしいわ。てことで

三人で解決するわよ」

「三人でか?」

「ええそうよ」

「じゃあ私とキンジが強襲ね。レキは後方支援ね」

「分かりました」

「おいアリア!俺は全く事件について知らされてないぞ!」

「アンタはただ強襲すればいいだけ!これは武偵殺しよ!それじゃあ

行くわよ!」

「おいちよつと待てよアリア!つたく勝手に一人で行きやがる。」

「金次さん」

「ん？なんだ？」

「カレンさんに近づかないほうがいいです。」

「なんでだ？」

「風が危険と言っている」

「風さんか？まあいいや後方支援頼むぞ！」

「…はい」

……

「バスが見えました」

「アンタすごいわね！」

「俺には全く見えないがな」

「それはあたしも同じよ」

「じゃあここからバスに乗り込むわよ！」

「はっ？ここからか？」

「そうよ」

「どうやって行くんだよ？」

「私の戦妹が昨日パラシュートを縫ってくれたわ。それでいくわよ！」

「おいちよつとまつt「うわあ！」」

ダン

何とかバスの上に着地したが

バンバン

「くっ！セグウェイが五台だと!？」

「キンジ援護をお願い！」

バラバラバラ

銃弾をばらまくが圧倒的に火力負けをしている。

「火力が足りないわキンジ！」

「俺に言われても」

ガン

…タアン

「これはレキか！」
「さすがね、あの距離からこんな正確な射撃をするなんて！」
「アリアさん、金次さん！セグウェイは私が何とかしますから早く爆弾を探してください！」
「分かったわ：行くわよキンジ！」

車内

「このバスには爆弾が仕掛けてやがります」
「なんなのコレ!？」
「早く先輩や教務課に連絡しないと！」
「助けを呼んだら爆発しやがります」
「っー！」
「みんな落ち着きなさい！私たちが何とかするから」
「先輩!!」
「武藤」
「なんだ？」
「運転手がグロッキーなんだ。お前代わりに運転しろ」
「ああ、分かった。」
「キンジ！爆弾を見つけたわ！」
「どこだ？」
「バスの下よ！これはもう解除できないわ！爆弾は3, 5000立方センチメートルよ！」
「なんだって！」
 そんなの電車だって吹っ飛ばせるぞ！
「レキ！アンタはバスの下の爆弾を解除して！」
「分かりました」
「キンジはセグウェイを壊すわよ」
「ああ：アリア！」
「えっ：きやあ！」
「アリア！アリア！」
「レキ！即効解除しろ！」

「私は一発の銃弾…」パアン　ギン

「金次さん！もう大丈夫です。アリアさんをエスケープしてください！」

「ああ分かった」

タアンタアン

「もうセグウェイは無力化しました」

「了解。レキ、衛生科を呼んでくれ」

「はい」

……こうしてバスジャックは終わった

……理子side

アハハハハ　アリアよわく！これで理子は理子になれるよ！

じゃあ私は計画を進めよう

キンジside

アリアはそのまま武偵病院に運ばれていった。

病院

「…アリア？」

「もういい。アンタは私の思っていたパートナーじゃなかった。これで契約は終了よ。さようならキンジ」

「アリア…」

自分は軽い考えをしていた。俺はそれを後悔している。

ガララ

俺は病室を出て行った。

第十四話 ハイジヤック①

キンジ side

くそっ！なんで世界は兄さんを悪人とするんだ！

次の日

…俺は昨日のことを考えないように掃除や洗濯に没頭していた。

そして、少し外出すると意外なところでアリアを見た。

…美容院？

アリアは制服かC装備でしか見たことなかったので新鮮な感じだ。

デートか？

と思ったと同時に俺はアリアを尾行してしまった。

…新宿警察署？

なんでこんなところに来る？

すると

「…：下手な尾行…：しっぽが見えてるわよ」

不意に声をかけられた。

「…：ばれてたのか」

「ええ」

「何で声かけなかったんだよ」

「迷っていたのよ。教えるべきかどうか…：でも武偵殺しの被害者だから

らアンタも知る権利はあるわね」

…新宿警察署

中に入ると留置所面会室に連れていかれた。

そこには女性がいた。

すると女性が口を開いた

「まあ、アリア！この子は彼氏さん？」

「ちっ、違うわよママ！こいつは武偵殺しの被害者なの」

「遠山金次です」

するとアリアのお母さんはおっとりとした雰囲気が一変

「まあ」

「最近ヤツの動きが活発化してきているの。昨日はバスジャックも起

きた。もうすぐしつぽを出すはずだから、そいつを逮捕してママの無実を証明出来たらママの懲役864年が一気に742年まで減らせるの。最高裁までに何とかするから」

アリアの言葉に俺は目を丸くした。

「864年って事実上の終身刑じゃないか！アリアのお母さんはそんなことするような人に見えないのに…」

「アリア。気持ちはうれしいけど、イ・ウーに立ち向かうのはまだ早いわ。それにあなたのその負傷はもうあなた一人では対応できなくなってきたいる証拠なのよ。それに、あなた…パートナーは見つかった？ひいおじい様にも優秀なパートナーがいらっしゃったでしょ。これは一族の遺伝なの。プライドが高いことはあなたの能力を全部出しきれていないのよ。」

「分かっているわよママ。今探しているところ。」

「そう」

「金次さん」

「はい？」

「何か最近変なことがなかったかしら？」

「変なこと？」

「例えば転校生が来たとか」

「っ！」

確かに転校生は来た。だがカレンのことは話せない。

「金次さん」

「なんですか？」

「今から二人で話しましょう」

「何ですか？」

「それは二人じゃないと言えないの。だからアリア、ちよつとここから出てくれる？」

「ええ。分かったわ」

「ありがとう」

「じゃあもう一度聞きますね。さっきの質問には何か答えがある？」

「…ありません」

「…ここは警察署よ。私の話は聞かれるけどあなたの話は警察官には聞かれないわ」

「そうですか」

「じゃあこつちにもうちよつと寄つて?」

「分かりました」

「じゃあさっきの質問に答えてくれない?」

「彼女の話は絶対にほかの人にはしないでください。」

「何で?」

「なんか世界から抹殺されると言っていました」

「っ! そうなの…じゃあ注意するわね」

「分かりました。じゃあ新しい転校生はとんでもない化け物なんです」

「化け物?」

「はい。実はランク考査でアリアを一瞬で倒したのです。」

「アリアを?」

「はい、しかし一撃で武偵高の体育館を壊したのですが…一秒後には負傷したアリアも体育館も何事もなかったかのようになっていました」

「何が起きたか分からなかったの?」

「一瞬で戻ったので何もわかりませんでした」

「ちなみにその子の名前を教えてください?」

「カレンです」

「…そう。分かったわ。これからもアリアをよろしくね?」

「はい」

「神崎…時間だ」

とアリアのお母さんはまた奥へ連れていかれた

かなえ side

「じゃあさっきの質問に答えてくれない?」

「彼女の話は絶対にほかの人にはしないでください。」

「何で?」

「なんか世界から抹殺されると言っていました」

という金次さんの話を聞いて私は戦慄した。

世界から抹殺って…イ・ウーレベルじゃない

「っ！そうなの…じゃあ注意するわね」

「分かりました。じゃあ新しい転校生はとんでもない化け物なんです」

「化け物？」

「はい。実はランク考査でアリアを一瞬で倒したのです。」

「アリアを？」

「はい、しかし一撃で武偵高の体育館を壊したのですが…一秒後には負傷したアリアも体育館も何事もなかったかのようになっていました」

「何が起きたか分からなかったの？」

「一瞬で戻ったので何もわかりませんでした」

そんなことが出来るのは限られてくるわ

「ちなみにその子の名前を教えてください？」

「カレンです」

カレンですって!?!一番ヤバイ子じゃないの!しかも何であの子がこんなところにいるの!

「…そう。分かったわ。これからもアリアをよろしくね?」

「はい」

私は心配だった

金次 side

外に出た。するとアリアが立っていた。

「行きましょう。何を話したか分からないけどおそらくカレンね?」

「…いや」

なんて感じがいいんだ!

「まあいいわ、私はママの件をただまっすぐに解決するだけよ。…でも…こじやなかったみたい。私はイギリスに帰るわ」

「……そうか、頑張れよ」

「うん」

うんまあ結構前向きだから良いな

…しかし何だこの違和感は？

ああ寮に着いたのか

「じゃあな」

「ええ」

…俺は寮へ行くが足音が聞こえない。…すると

「…キンジ…アンタみたいなのはもう見つけれないよお…」グスン
泣いていた。

しかし俺はどうすることもできなかった

少しするとアリアは行ってしまったようだ。

チャララン

なんだ？

それはメールだった。

そこには

「キー君、明日会えない？台場のクラブ・エステーラにいるから」

…なんだこんな時に

だが理子が会いたいというのはなんだか気になる。

まああってみよう

…次の日

クラブに入ると理子がいた

「キー…クーーン！」

ひらひらの改造制服で走ってくる女の子がいた

「お前なんだよ…こんなところに呼びだして…」

「キー君のお手伝いをしようと思ってるね〜！まあこっちに来て〜！」

これを見た武偵高の女子がヒソヒソ話している。

「ヤダキンジ、今度は理子ちゃんと付き合ってる」

「キンジってチビ専なのかな？」

「いや、星伽さんもいるから違うと思う」

等と話している。

なので俺はおとなしく理子のほうへ行った

「なんだよ理子?」

「理子なりに今回の事件を探ってみたらこんなことが出てきた」と理子がパンフレットを出した。

俺はそれを見て驚愕した。

「ねえ、可能性事件って分かる?」

そこには俺の兄が巻き込まれた事件

「2008年12月24日 浦賀沖海難事故 死亡 遠山金一武

偵(19)」

と書かれていた。

「これってキー君のお兄さんでしょ?ねーこれってシージャックだったよね?」

理子の声はやけに遠く聞こえる

…武偵殺し、何で兄さんを…ニイサンヲネラッタ!

「良いよキンジ!」

理子の声にはっとした

「私はキンジの目に一目ぼれしちゃったんだ」

「理子?」

「ねー?いいことですよ?ここは理子ルートだよ?」

と俺は理子に押し倒され…ベットに倒された

「キンジってほーんと鈍感。無理やり鈍感になろうとしているみたい」

理子が俺に近づいてきたその時

ドクンドクン!

ふっ!

と俺はヒステリアモードになっていることが分かった。

(これは…アリアが危ない!)

「ごめんよ理子!」

「キンジ?」

と俺は空港へ向かった

第十五話 ハイジャック②

空港

キンジ side

俺遠山金次は走っていた。

それは最悪の事態を閃いたからだ。

俺の推理が正しければ…アリアはもうすぐ会ってしまう。あつてしまうのだ：「武偵殺し」に

と俺は空港のチェックインを武偵手帳に付いた徽章で通り抜け、金属探知機なんか無視してゲートに飛び込む。

もし…もし武偵殺しが本当に一人で兄さんを倒したとしたら…アリアは戦つてはいけない！

お前では勝てないのだ！絶対に！

それほど兄さんは強かったのだ。

今戦うとお前は死んでしまうんだ！

バタン

俺が機内に駆け込んだ後すぐ後ろのハッチが閉じた。

間に合った。

そこに目を丸くしているフライトアテンダントがいた。

「武偵だ！離陸を中止させろ！」

「お客様!?!失礼ですがどうゆう?！」

「説明している暇はない！今すぐ中止させろ！」

「機、機長に連絡してみます。」

とフライトアテンダントが走っていったから追いかけてようと思っただが

「はあつはあつ」

強襲科をやめてから動いていないから体力が落ちていたのだ。

確かにここまで全力疾走したらこうなるわな

と、そこにさっきのフライトアテンダントが戻ってきた。

「あつあのおだめでした！ここは管制塔からの命令で動いていて…離陸は止められないんです！」

ぐらり

「クソ野郎！まあいい。じゃあベルト着用サインが消えたら神崎・H・アリアの席に案内してくれ。」

「わっ分かりましたあ」

ポーン

ベルト着用サインが消えた。

「お客様こちらです」

「ああ」

この飛行機は普通の旅客機とは違った構造をしていた。

一階は広いバーに、二階、中央通路の左右には扉が並んでいる。

これは空飛ぶリゾートと言われていたやつか

「お客様こちらです」

「ありがとう」

と俺が座席もとい個室になっている扉を開けるとアリアがいた

「キ、キンジン!？」

よし。まずは合流できたな

部屋はものすごく豪華だ

「…さすがはリアル貴族様だな。コレ、チケット20万ぐらいするんだろ?」

アリアは俺が急に来たことに怒っているようだ

「断りもなく部屋に押しかけてくるなんて、失礼よ!」

「お前だって俺の部屋に押しかけてきただろ」

とアリアは自分のしたことを思い出したようだ。

ぐぬぬ

返す言葉もないようだ

「何で来たのよ?」

「武偵憲章第二章…依頼人との契約は絶対守れ」

「なんなのよ今更」

アリアはスカートの裾に手をやった

よかった帯銃しているんだな

「強襲科に戻ってきた最初の事件を最後まで解決する。」

「それはもう終わったわよ！」

「武偵殺しの件はまだ終わっていない」

「なんなのよ！役立たずのくせに！」

「帰りなさい！帰りのチケットぐらい買ってあげるから！それに…アンタはもう他人よ！あたしに話しかけないで！」

「もとから他人だろ」

「うるさい！しゃべるの禁止！」

強風の中飛行機は空を飛んでいくと

ガガーン！

「ひっ！」

「お客様にお詫び申し上げます。この飛行機は強風、嵐の中を通り抜けるので到着が三十分ほど遅れます。また雷などなるかもしれません。当機には問題ありませんのでご安心ください」

ガガーン

ひととき大きな雷が鳴ると

「ひう！」

「怖いのか？」

「こ、怖くなんかない！てゆうか話しかけないで！アンタはたにん「ガガーン！」きやつ！」

「雷が怖いならベットにでも潜っているよ笑」

「う、うるさい！こんなのこわくな「ガガーン」うわあ！」

そしてアリアは本当にベットに潜ってしまった

アリアの苦手なもの一つ発見だな笑

ガガーン！

「キ、キンジィ！」

と俺の服の袖をつかんできたので

「俺は他人じゃなかったのか？」

と言った

「グスン」

「ほ、ほら、怯えんなって。テレビつけてやるよ」

どうやら俺の他人状態は解除されたようだ

ピッピッ

と俺がチャンネルを変えていると…

「この桜吹雪、見覚えがねえとは言わせねえぜ！」

おっ！これはうちのご先祖様を書いたものだな

名奉行…遠山の金さん

兄さんによるとこの人もヒステリアモードを持っていたようだ

「ほら、これでも見て気を紛らわせ！」

「う、うん」

こうやってみるとアリアも女の子なんだな、と思う。

「アリア、」

震える手を握ってやって

「キ、キンジ？」

いつもならこんなことはしないが…カレンと二回も二日連続で手をつないだことを考えればどおってことない。

こうやってアリアの震えを和らげることぐらいはできる

…アリアが何かを言おうとしたとき

パンパン！

！これは銃の発砲音だ！

俺が狭い通路に出ると大混乱となっていた。

「なんだとー！」

そこにいたのはさっきのアテンダントだ。

そいつが機長と副機長を連れてきた。

二人は気を失っている

俺は

「動くな！」

アテンダントは

「お気を付けてください。でやがります！」

とアテンダントが缶を投げてきた

「！」

俺の背筋が凍った

シユウウウウウ

「みんな自分の部屋に戻るんだ！」

もし強力なやつだったらお終いだ！

俺もアリアを部屋に押し込むように入った
バチン！

暗闇となった。

それによって機内はさらにあわただしくなった。

「キンジ！大丈夫？」

俺を心配しているようだ

俺は息をしてみるが…大丈夫だ。あれはただの無害なガスだったのだ。

俺はアリアに

「アリア、このふざけたしゃべり方は…武偵殺しだ！やつぱり来やがった！」

「…やつぱりって…！アンタ武偵殺しが来るとわかって！」

アリアの目が見開かれていく

「武偵殺しは…チャリジャック、バスジャック、ハイジャックとだんだん規模を上げてきた。…これはある武偵の話だが…バイクジャック、カージャック、そしてシージャックと同様の手口を使ってある一人の武偵を仕留めたんだ。それは直接対決だったそうだ」

「…どうして？」

「そのジャックはお前が知らなかったものだ。電波は受信してなかっただろ？」

「う、うん」

「これは武偵殺しからの挑戦だ！今お前と戦おうとしている！このハイジャックでな！」

「!!」

そこに

ポーンポーンポーンポーンポーンポーンポーン

「…和文モールスね！」

そこには

オイデ オイデ イ・ウーハ ワタシハ イツカイノ バーニ

イルヨ

「…誘ってやがる」

「調子に乗りすぎね！行くわよキンジ！」

「ああ、もちろんだ」

俺たちは一階のバーに着いた

そこには

「!!」

拳銃をアテンダントは向けてきた。

しかも武偵高の制服を着ているのだ！

…この改造制服は…

「理子！お前なのか！」

アテンダントは

「今回もきれいに引つかかってくれやがりましたね！」

ベリベリ

変装の仮面を取った中からは

「理子!!」

「Bon Soir」

くいつとカクテルを飲んでいたのは…やはり理子だった。

理子は

「頭と体を使って行動するのってさあ、結構遺伝するんだよねえ…お

前の一族もそうだろう「オルメス！」

「!!」

それを聞いたアリアは硬直した

オルメス？

なんだそれ？

それがアリアの「H」の家なのか？

「…あんた…一体何者!?!」

理子はニヤツと

「峰・理子・リュパン四世」

…リュパン!!

それってあの探偵科の教科書に載っていたやつか！

「でも…一族みんな私を理子と呼んでくれなかった…四世、四世様あ…って」

「四世の何が悪いのよ!」

「!!悪いに決まっているだろ!あたしは数字か!DNAか!あたしは理子だ!数字なんかじゃない!」

いきなり切れた理子に俺たちは圧された

「ひいおじい様を超えなければあたしは一生理子にならない!…だからイ・ウーに入ってこの力をつけたんだ!あたしは自分の力で自分をもぎ取るんだ!」

俺は全く分からなかったので

「待て、待ってくれ理子!お前が…武偵殺しなのか!オルメスってなんだよ!イ・ウーってなんだ!」

「プロローグを兼ねたお遊びだよキンジ。本命は…オルメス四世!アリア!お前だ」

このアリアを見る理子の目は獲物を狙う獣の目だ。

「百年前、ひいおじい様同士の対決は引き分けだった。つまり、おまえを倒せばわたしはひいおじいさまを超えたことになる。だからキンジ、おまえもちゃんと役割を果たせよ」

今度は俺のほうを見た。

「オルメスには優秀なパートナーがいた。お前をアリアとくつつけたのは、条件を合わせるためさ」

「俺とアリアを…お前が?」

「そっ!」

理子はいつものような軽い感じになった。

…コイツいつもバカを演じてたのか!?

「キンジのチャリに爆弾を仕掛けて、わかりやすい電波出してあげたんだよ」

「あたしが武偵殺しを狙っているのを知ってたのね!」

「そりゃあ気づくよ。でもおろキンジがやる気じゃなかったっぽいから、バスジャックも起こしてあげたんだよ」

「お前が?」

「キンジい〜！武偵はどんな理由があっても人に時計は渡しちやだめだよ〜！狂った時間なんて見たら遅刻しちゃうぞ〜！」

「…何もかもお前のせいだよ」

「そっ！でもお〜…誤算だつてあつたんだよ。キンジがお兄さんの話を出すまで動かないなんて思つてもなかったから。」

「…兄さんを…お前が！」

「キンジ！落ち着きなさい！」

「キンジ、いいこと教えてあげる。今キンジのお兄さんは理子の恋人なの。」

「いい加減にしろ！」

「これ以上兄さんを侮辱するな！」

俺が銃を握る力を強めたとき
ぐらり

「！」

気が付いた時には銃は明後日の方向に消えていた。

銃はガシャンと言つて壊れた

理子を見るとこっちにワルサーP99をこっちに向けていた

「ノンノンだめだよキンジ。今のお前は役に立たない。お前はオルメスの能力を引き出せばいいの」

とアリアが動いた

理子の武器を見たのだろう。

装弾数はアリアも同じだ！

「アリア、自分だけが二丁拳銃だと思つちやいけないよ」
不意に理子の髪が動いている。

「！」

もう一丁理子は銃を持っていたのだ！

「くっ！」

「アハハハハ」

アル・カタだ

「はっ！」

弾切れを起こした瞬間アリアは双剣で理子を狙う

「奇遇よね〜アリア!」

「まただ! 理子の髪が不自然に動いている。」

「!」

その髪が理子の後ろに隠してあった剣を抜いたのだ!

「!」

一発目は避けたものの

「うわあ!」

二発目の剣に側頭部を切られたっ!

「アハハハハ! ひいおじい様! 100年の歳月はこんなにも差をうんじやったのです! なれるよ! 今日理子は本当の理子になれるよ!」

「化け物だ!」

とにかく俺はアリアを連れて逃げるしかない。

「どこに行くの? どこに行っても無駄だけど!」

とにかく理子から離れなければ!

「じゃあキンジもさようなr「ごーんねん」誰だ!」

これには俺も驚いた。この戦いにも怖気づに來たなんて…誰なんだ!

「ごーんねんでした〜理子ちゃん!」

「!」

理子を見ると首に刀が添えられていた。

「誰だ!」

男喋りの理子が言った。

俺も誰か分からないので警戒していると……………

——止まっている!!

これは見たことが…いや、体験したことがあるぞ!

これはカレンだ! こんなことが出来るのは彼女しかいない!

「キンジ君! アリアちゃんを連れて時間が動いたら逃げて! 私が倒すか足止めするから!」

「ああ! ありがとう! 頼んだよ!」

「は〜い!」

カレンside

一階が騒がしいから来てみたら

アリアちゃんが理子ちゃんに切られた！

「アハハハハ！ひいおじい様！100年の歳月はこんなにも差をうんじやったのです！なれるよ！今日理子は本当の理子になれるよ！」

理子ちゃんおかしくなっている？いや、アリアちゃんと決着をつけようとしてるんだね。…でもこのままだとアリアちゃん死んじゃうから手助けしてもいいよね？

ということだ

…：時間が止まった。

実は対象の者に触れていなくても私の任意でその人だけ動かすことが出来るんだ〜！

えっ？キンジ君に触れたのは何でっ？そりゃあ手をつなぎたかったからだよ！

まあそんなことはおいておいて

「キンジ君！アリアちゃんを連れて時間が動いたら逃げて！私が倒すか足止めするから！」

「ああ！ありがとう！頼んだよ！」

「は〜い！」

私も信頼されてるなあ〜：ようし！がんばろう！

理子side

これで私は理子になれる！

少し楽になったその時

「！」

誰だ！

私に気づかれずに首に刀を添えるなんて！っ！

キンジside

俺はカレンにまでも助けられてしまった。

だが今はカレンの言うことに従おう。

「今のうちに逃げて！」

「ああ」

頼んだぞ！

理子とカレン

「ねーねーカレンちゃん〜」

「どうしたの？」

「お前何でこんなところにいる！」

「おー怒ってるんだね〜。今イギリスに行こうと思っていたところだよー。」

「何のためだ？」

「それは秘密だよ。じきに分かると思うけどね〜」

「悪いんだけどお、そこをどいてくれない〜？」

「それはできないよ〜」

「じゃあ死ね！」

と理子がカレンに襲い掛かった

「!？」

「そんなんじやあ当たらないなあ」

「どうやってよけた？」

「それも秘密だよお〜!…これは避けられるかな？」

「くっ！」

「そんなんじやあ甘いなあ」

「なんだと！」

「それじゃあ一世は超えられないなあ」

「調子に乗るな！」

「ぐふう！」

「ほらほらそんなんじやだめだよ〜！」

今のはカレンが銃撃したのが下腹部に当たったからだ

「手加減してるのになあ〜」

「調子に乗るんぐはっ！」

これは一方的に理子がカレンに襲われている

「弱いから…ちよつと眠っててね〜」

とカレンが手刀を入れようとしたら

「カレン待ってくれ」

「キンジ君?」

「カレン、君みたいな娘がそんなことしちやいけないよ。手を汚すのは男の俺だけでいい」

お〜!これはHSSになってるね〜!やっぱりかっこいいなあ!

ん?後ろでアリアちゃんが顔を真っ赤にしているね。なんでだろう?でも

「そんなこと言われたらしようがないなあ」

「ありがとう。君はここで休んでいてね」

「うん!」

まあここからはキンジ君に任せて良いだろう

キンジ君の本気も見てみたいしね

「じゃあ理子、お仕置きの時間だ。」

「なっ何?」

さっきのせいで怖がっているようだ

「君を逮捕するよ」

「ああんキンジさいつこ〜!」

さっきまでの理子はどこへやら

「いくぞ!」

とキンジ君が飛びかかったところで

グラリ

飛行機が揺れた

「!」

危ない!キンジ君が撃たれちゃう!

助けに行こうとしたが

「君はここで休んでいてね」と言われたことを思い出してとどまる。

パァン!

ギイーン!

キンジ君が銃弾を切ったのだ!

おお、すごい！人間にもこんなことできる人がいるんだ！

「理子！逮捕よ！」

「くっ！」

初めて理子ちゃんがこの二人との戦いで焦っている。

「そこまでだ！」

「ばー！ーか！」

「こんなところでどこに行くんだい？」

「くふっ！これ以上近づかないほうがいいよ！」

「！」

「ご存知の通りワタクシは爆弾使いですから」

ピッ

ドカアアアン

爆発した。

「ねえ、この世の天国イ・ウーに来ない？ここなら、お兄さんもいるよ？」

「これ以上俺を刺激すると衝動的に武偵法9条を破ってしまうかもしれないから」

武偵法9条ー武偵は殺人を禁じられている。

「あつ、それは大変だなあ。キンジにはまだ武帝偵でももらわないと。それじゃあバイバイキーン！」

上空

……「何でいるの!？」

「フフフフ！」

「なっ、何!？」

「アハハハハ！」

「ど、どうしたのかレンちゃん!？」

カレンside

ドカアアアン！

爆発したけど大丈夫？

シュウウウウ！カスツ！

!!!私の服に、私にわたしにワタシにワタシニ！

気づけば私は妖力全開になっていた。

「カレン!!どうしたんだ!」

「フフフフフ!アハハハハ!殺してあげる!壊してあげる!イ・ウーなんて!」

「と、とにかく落ち着いて、な?」

「残念だけどそれはできないよキンジクン!」

「つつつ!」

「じゃあね」

これは止められそうにないなあ!

覚悟してね!イ・ウー!

キンジ side

ドカアアアン!

爆発させやがった!

すると爆発よりも背筋が凍った!

これはカレンか!

あの時に似ている殺気を感じたからだ。

体中の穴という穴から冷や汗が出てくる。

前とは比べ物にならない殺気だ!

とにかくカレンを止めないと!

「カレン!!どうしたんだ!」

「フフフフフ!アハハハハ!殺してあげる!壊してあげる!イ・ウーなんて!」

マズいぞ!暴走でしまっている!しかしおれじゃあ止められない!

「と、とにかく落ち着いて、な?」

「残念だけどそれはできないよキンジクン!」

殺気に当てられて声も出なかった

「つつつ!」

「じゃあね」

カレンは行ってしまった。

第十六話 ハイジャック③とカレンの暴走

「キ、キンジ?」

「どうした?」

「さっきのあれって…カレンよね?」

「あつ、ああ」

「この前戦った時とは別人のようだったわ。しかもイ・ウーを壊す?とか、殺してあげる! って言ってたから…マズいんじゃない?」

「確かにそうだが、俺たちに止められるか? お前だって全く歯が立たなかっただろ」

「た、確かにそうだけど…武偵法9条破るんじゃないの?」

「それは…分からない」

「……………」

「それよりも今俺たちがやることは一つしかない!」

「この旅客機を着陸させることだ!」

「そうね!」

「アリア、旅客機の操縦したことあるか?」

「いいえ、小さい一人用ならあるけど…こんなにも大きなもの操縦したことはないわ。でも、上下左右ならできるわ!」

「着陸は?」

「できないわ」

「それでもやるしかないだろ!」

「えっ、ええ」

すると

「こちらは防衛省、空港への着陸は許可しない、現在閉鎖中だ」
「何言ってるやがる!」

窓を見ると…戦闘機だ!

「おい、アンタのお友達がいらっしやるぞ」

「それは誘導機だ。安全なところまで誘導する」

アリアが操縦桿を傾けようとしたとき

俺はアリアの手を握って傾けさせない

「おい、これは撃墜させるつもりだろ」

「何を言ってるんだね？」

「東京に突っ込まれたらたまったもんじゃないんだろ？だから撃ち落とすとして海に落とそうとしているんだろ？」

「そんなことはない」

なので俺はあいつを信じて…

「この飛行機にはカレンが乗っている。あいつに殺されても知らないぞ？」

「何!!ちよつと待て!おいお前ら急いで名簿を確認しろ!」

向こうで何か言っている。

やはり何かあるんだな

「……………申し訳ない!急いで戦闘機を退散させる」

戦闘機が離れていく

「カレンって何者?」

「俺にも分からないよ」

ヒステリアモードの頭が何をすべきか浮かばしてくる

「さあ、二人で着陸させよう」

「えっ、えええ!」

上空

理子とカレン

「どうしちゃったのカレンちゃん!」

「ねーね理子ちゃん?死にたい?」

「!!嫌嫌嫌だよお!!」

「アハハ良いね!その表情!じゃあ私もイ・ウーに連れて行って?」

「う、うん分かった。でもどうやって降りるの?」

「それは大丈夫だよ」

ストン

体重がないかのようにかるーく降りた

「じゃあイ・ウーだよ。行こ？」

「うん！」

二人移動中

イ・ウー内

「……………カレンちゃん？」

「ん？」

「なんでこんなに俯いてるの？」

「連れてこられたって見せるためだよ」

「そうなんだ。でも今から行くところでは、ゼーったいに戦っちゃだめだよ！」

「なんで？」

「その人はここで一番強い。カレンじゃ殺されちゃう」

「それは大丈夫だよお〜！」

だってシャーロックさんでしょ？

余裕余裕

「さっ、着いたよ」

コンコンコンと理子が叩こうとしたとき

「空いているよ、入り給え」

「はあああー。またか」

「またか？」

「ここにいる人は推理しているからだよ。誰が来てもわかっちゃうんだ」

ん？私のは何も言わなかった気がするんだけど…

「じゃあ入るよ」

「うん！」

「失礼します」

「どうだったんだい？理子君？」

「だめでした…」

「そうかい、じゃあ君の後ろにいる子は誰だい？」

「推理してないのですか？」

「ああ、そうだと、君が誰かを連れてくるなんて思ってもみなかった

よ

「そ、そうですか」

「それじゃあ後ろの子、出ておいで」

「……………」

「どうしたんだい？僕は敵じゃないよ。さあ顔を上げてご……………らん？…!!カレン君！」

「えっ！知ってるんですか？」

「知ってるも何も私はこの子に負けたのだよ。」

「!!」

理子がびっくりしている

「今日はなんのようだい？」

「……………ろす」

「ん？」

「こ……………す」

「なんだい？」

「殺してあげる！」

「!!」

「ねーねーシャーロック！誰がミサイルを撃ったの？ねえ？だあれ？」

「ちよ、ちよつと待ってくれ…なんでそれで君が怒っているんだい？」

「そのミサイルがわたしを掠ったんだよお！どうしてくれるの制服??？」

「ミ、ミサイルを撃ったのは僕だよ。まさか君に当たってしまうなんてね」

「じゃあシャーロック死刑だねえ！」

「っ!!!理子君！ここから逃げるんだ！」

「えっ？はい！」

「どうしたんだい？君がこんなになるのをはじめてみたよ」

「私の楽しみを邪魔したから」

「それは僕にも推理できないな」

「じゃああなたには地獄を見てもらうよ！」

「地獄？はっはっはっ！面白いな。僕も見たことないんだよ！」

「好奇心が高いことはいいことだけど…さようなら！地獄で苦しみなさい！」

「くっ！うわああああああああ！やめてくれ！殺さないでくれ！
ぎやああああああああ！うわああああああああ！」

これはおそらく殺されて、また生き返り、殺される、の繰り返しだからだ

バタン！

一人の女性が入ってきた

「失礼し…ま…す!?教授!どうしたんですか!？」

これはカナさんだ

「カレン!何やってるの!」

「カナさあん、どうしたの?」

カナ s i d e

何か理子ちゃんが焦って部屋から出てきたから何かあると思ったから教授の部屋に行ってみるわ

バタン

「失礼し…ま…す!?教授!どうしたんですか!？」

どうして!?教授がこんなになっっているなんて!

「うわああああああああ!やめてくれ!殺さないでくれ!
ぎやああああああああ!うわああああああああ!」

どうなっているかは私にも分からない。ただこの子によってこうなっていることはわかる

「カレン!何やってるの!」

「カナさあん、どうしたの?」

!?!これは暴走している?マズいわね。教授にはまだ生きててもらわないと

「やめてカレン!」

「なんでえ?」

「教授にはまだ生きてもらわないといけないの」

「ふーん……じゃああなたが1分これに耐えられたら解放してあげるよ」

「分かったわ。」

「じゃあ苦しみなさい！」

私の目の前にはかつての仲間、親族が立っている。

わたしは丸腰だ、なぜかHSSも使えない。手足が縛られている。

……！何でそんな目で見るの？

チャキ

わたしに銃を構えてきた

「やめて！撃たないで！」

だが

パン！

無情にも弾は私の心臓へと放たれた

「ぐふっ！私は死ぬのね……」

だが

何で！何で死んでないの！

死んだはずだが生き返っている

次はかつての仲間だ

「嫌、あなたは撃たないわよね！」

だが

パン！

また無情にも弾は私の心臓へと放たれた

「嫌あ！」

だが

何で生き返ってるの！

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！もうやめて！」

とまた次の人に撃たれそうになった時

「どうだった？なかなか耐えていたね」

女の子の声が聞こえる

わたしもけがをしていない

「なん……だったの？」

こんな地獄はもう二度と見ないだろう

「これは私が作り出した、あなたが最も嫌なことを幻覚として見せたものだよお〜」

化け物だ。

こんなことを平然とできるなんて…ありえない

「でもお、あなたが耐えたから、シャーロックも解除してあげよう」

パチン

彼女が指を鳴らすと

「はあつ、はあつ、はあつ。これが地獄かい？もう二度と見たくないよ」

そうだ、教授はもっと長い間これを受けていたんだ

「大丈夫ですか？」

「いいや、大丈夫じゃないよ。これは一週間はトラウマとしてよみがえるよ」

「それじゃあ私はまあ満足したので行きますねえ〜。それじゃあ、じゃーね〜！」

シユン！

消えた

カレン side

「こんな姿を見たのは初めてだなあ。ほかの人にはやめておいてあげようつと」

と私は飛行機のほうへ飛んで行ったが着陸している。

キンジ君が何とかしたんだね。さすがだよ！

わたしはゆったりと戻っていった。

キンジ side

俺はアリアを救う、乗客を救うために頭を駆使して閃いた。

「止まれ止まれ！」

俺は地上で方向転換をして風力発電の柱に当てた

ガシャンンン！

なんとか止まったな。

そういえばカレンはどうしたのだろう。

俺は外へ歩いていくと

「さすがだねキンジ君！」

カレンがいた。

「おま、おまえ何でこんなところにいるんだ!？」

「普通にストレス解消してきて、あの移動をしてきたんだよ」

あの移動と聞いて

「なるほどな、確かにそれならここに居られる」

よかった、殺人は多分していない

「じゃあ行こっか」

「そうだな」

「あとで事情聴取だよ」

「なんでだよ!」

「私の名前を使ったでしょ? 私に連絡が来たんだけど…OHANAS

Iしなないといけないねえ?」

「っ!」

そうだ、とっさにコイツの名前を使ってしまったんだ。

これをやったのは俺なので

「いいぞ、なんでも言うことを聞いてやる」

「うーん? じゃあ今度一緒に買い物に行こ?」

「ああ」

良かった、この程度で済むならおつりが返ってくるぐらい良い提案だ

「やったあ! じゃあ日程は今度言うね!」

「分かった」

「じゃあどうやって帰る?」

「?」

「面白い帰り方する?」

「面白い?」

「そっ!」

「？」

「じゃあ何も言わないから、ん！」

何もカレンが言わなかったが時間が…止まっている。

「おい！触らないといけないんじゃないのか？」

「えへへく違うよ〜！」

「なっ！」

「キンジ君と手をつなぎたかったから…かな？だめ？」

「っ！だめじゃない」

「なんで顔赤いの？」

「それぐらいわかってくれよ！」

「分からないなあ〜。まあいいや、キンジ君の部屋って何号室？」

「101だ」

「分かった〜じゃあ101号室！」

ぐにやり

なんだこれ！空間が曲がっている！

「じゃあここに入って？大丈夫だよ」

「あつ、ああ」

怖いが大丈夫だろう

入ったらすぐそこに光が見える

「こつちだよ〜！」

出てみると

「俺の部屋だ！」

これは凄すぎる！

「じゃあまた今度ね〜！」

「ありがとう」

「じゃーね〜！」

行ってしまった。

本当に今日はありえないことばかりに遭遇してるな
と思ったキンジだった

第十七話 ボディーガード

自分の部屋に戻ってきたカレン

やった〜！キンジ君とお買い物ができる〜！

ここでは部下も見なかったことのないようなテンションでいた。

いつ行こうかなあ？明日？それとも明後日？

いや、キンジ君にも聞いてみよ〜つと。

次の日

また遅刻だあ〜！キンジ君はどうかな？

……いないなあ〜

何してるんだらう？

わたしは一人学校への道を歩いていく。

(はあぁーキンジ君がいないと力を使う気にならないけど…遅れたくないしなあ)

と私は渋々力を使って学校へ行った。

学校で

私が学校に着くと張り紙が出ていた。

生徒呼び出し 2年A組強襲科、カレン、2年B組超能力捜査研

究科、星伽白雪

ん？私何かしたっけ？…もしかして力使ったのバレた!? いや、そんなはずは

と私が考えていると

「カレン！何でお前が呼び出されてるんだ？」

キンジ君だ

「私にも分からないんだよ」

キンジ君がはつとなつて

「まさか力を使ったのがばれたとか？」

私の考えていたことと同じだ。だが

「それはないと思うなあ、」

「なんでだ？」

「確かに急に現れるけどこれを感知できる人は私しかないから」
「そ、そうなのか」

安心しているように見える。

「それよりも時間ヤバイぞー!」

「あつ! そうだった!」

私たちは走っていった。

授業後

私は教務課の前に来ていた。

そこに、

大和撫子のような人が来た。

「あれっ? 初めて見たけど…」

「私はカレンです。よろしくお願いします!」

「私は、星伽白雪です。よろしくお願いします」

と90度のお辞儀をしてきた。

(礼儀正しい人だなあ)

「白雪さん、学科は?」

「超能力捜査研究科です。カレンさんは?」

「私は強襲科だよ。接点がないね。何か心当たりある?」

「ううん。私にもないんだよ」

「うーん、まあ、行ってみよう。早くしないと何されるか分からないからねえ〜」

「そ、そうだね」

コンコンコン

「失礼しま(ー)す」

「おお、来たか、じゃあ奥に來い。」

私たちは教務課の奥の尋問室に連れていかれた

奥には綴先生がいた。

部屋に入ると

(けむたっ! なんですかこのたばこのにおいは! ヤバイやつじゃないの!?)

綴先生が

「星伽いゝ、お前最近急うゝに成績が落ちてんじやないのゝ？…まあ、そんなことはどうでもいいんだけど」

（いや、よくないでしょー！）

「えーつと、あれ、あれだよ、うーん、あつ！変化、変化は気になるんだよねえゝ」

（変化って言葉くらいすぐ出しましょうよ！）

「ひよつとしてお前、魔剣にコンタクトされた？」

「魔剣…ですか？」

魔剣…超能力を持つている武偵を攫うやつだねゝ

「それはありません。しかも何で私なんかを魔剣が狙うんですか？」

「お前はもうちよつと自分に自信を持ってよく。お前はウチでも秘蔵っ子なんだぞゝ？」

「そんな、私なんか」

「前から言ってるけどさゝ、そろそろボディーガードつけたら？ 諜報科や超能力捜査研究科だつてお前を狙っているっていうレポートを出したんだぞゝ。しかももうすぐアシールドだ、」

「それでも…」

「うちらはお前が心配なんだぞゝ！これは命令だ、ボディーガードをつけろ」

フーッ

とたばこの煙を吐く

（ぎゃああーコレヤバイよ！）

「げほっげほっ」

「分かりました。」

「あつ、そういえばなんで私も呼ばれたんですk」そのボディーガード私たちがやるわ！」

私が言おうとしたらアリアちゃんと…キンジ君!?

むきゆっ という音をアリアちゃんが出した

「んゝ？なにこれゝ？あー、この間のハイジャックのカップルじゃん」

「これは神崎・H・アリア　二つ名は双剣双銃のアリア。欧州で活躍したSランク武偵。だけどその手柄はロンドン武偵局の業績にされてる。協調性がないからだあくマヌケ〜！」

「あ、あたしはマヌケじゃない！あたしは貴族だからそうゆう手柄を自慢しない！」

「おーおー損なご身分だねえ〜。そういえばアンタおよ〜g」

「わーわー！違うもん！浮き輪があれば泳げるもん！」

（アリアちゃん泳げないんだ…）

「——んでこっちは遠山キンジくん」

「あつ、俺は来たくなかったんですが、アリアに勝手に連れてこられました」

「性格は非社交的。他人から距離を置く傾向にあり」

（なんなの子の人！みんなのデーターが全部入ってるのかな？）

「——しかし、強襲科の生徒の中には一目置く生徒がほとんど。潜在的にはある種のカリスマを持っている。解決事件は、猫探しとハイジャック……ねえアンタ、なんでやることの大小が極端なのさ？」

「俺に聞かないでください」

「武装は、違法改造のベレッタ・M92F」

「それはこの前のハイジャックで壊されました。今は米軍払下げのものを使っています。」

「それも装備科に改造予約してるだろ」

ジュッ！

「うわっち！」

（あつそ〜だなく）

「で、最後にカレンさん」

（私かい）

「性格は協調性あり。勉強の成績も良い。」

「あはは」

「しかし、強大な戦闘力を持っている。」

（わお〜）

「その戦闘力はSランクもを凌ぐと推定。現在Bランクだがそれは虚

偽だ。」

「まじですか」

「ちなみに、お前……超能力使えるだろ」

「えっ？」

「急に現れたりすることが多々。」

「あははは。身に覚えが……」

「教師にも実は見られてんだぞ〜！」

（あはは〜ばれてた〜！）

「ちなみに超能力のグレードは推定30。」

「30!!」

「世界最強と言っても過言ではない。なんか一つぐらい見せてくんない〜？」

「えへへ〜。何がいいですかあ〜？」

「あの、神崎と戦った時に使った急に銃弾が飛び出してくるやつ」

「ああ〜！じゃあ強襲科へ行きましょう！」

「その前に、お前もボディーガードをつけろ」

「私には必要ないですよ〜」

「じゃあ遠山、お前がやれ」

「お願いします！」

「なんでだよカレン！お前まで！」

「えへへ〜！キンジ君に護衛してもらえるなんて〜！じゃあ行きましよう〜！」

「ちよつと！あたしも行くわ！」

「私はいったんSSRに帰ります」

全員移動中

強襲科体育館

ここは強襲科。卒業時の生存率が97.1パーセントと、約3パーセントの生徒が死亡するため、「明日無き学科」とも呼ばれる。

そこへ四人の人が入ってきた。

「蘭ちゃん。ちよつとこの三人借りるわ〜」

「おお？綴か！お前が自分から動くなんて初めて見たわ〜！何人か殺

しとけ！ん？遠山か！お前らが来るなんて珍しいな。さつさと死ね！」

(ほんとに死ぬ死ね言ってますねえ)

「ちよつと射撃レーン借りるよ」

「ああ、いいだろう。誰が撃つ？」

「カレンだよ」

「ほお、あいつがが……おい！一年！カレンの射撃を見ろ！」

ざわざわざわ

多くの生徒が集まってくる。

中には

「おい！遠山キンジだよ！」

「あいつが強襲科2年の首席候補か！」

「ん？なんだあの女の子？」

「あの人も2年の先輩かな？」

「上勝ち行けるんじゃない？」

「確かにあの体型じゃあ格闘や接近戦に持ち込めば余裕だな！」

と口々に言っている。

「じゃあ行きましょう！」

キンジ side

「蘭ちゃん。ちよつとこの三人借りるわ」

「おお？綴か！お前が自分から動くなんて初めて見たわ！何人が殺しとけ！ん？遠山か！お前らが来るなんて珍しいな。さつさと死ね！」

蘭豹先生かよ

「ちよつと射撃レーン借りるよ」

「ああ、いいだろう。誰が撃つ？」

「カレンだよ」

「ほお、あいつがが……おい！一年！カレンの射撃を見ろ！」

ざわざわざわ

多くの生徒が集まってくる。

中には

「おい！遠山キンジだよ！」

「あいつが強襲科2年の首席候補か！」

「んん？なんだあの女の子？」

「あの人も2年の先輩かな？」

「上勝ち行けるんじゃない？」

「確かにあの体型じゃあ格闘や接近戦に持ち込めば余裕だな！」

と口々に言っている。なんか俺のことも言われているが…カレンについては全く戦力差が分かっていないな。

「じゃあ行きましょう！」

カレンが言った

射撃レーン

「じゃあカレン…あの銃撃を見せてみろ〜」

綴先生が言った。

でもあれは感知できないんだよな

「分かりましたあ〜」

一年だけでなくあのランク考査に来ていた2年や3年の先輩までいる

「じゃあいきま〜す」

バシユツ！

「「はっ？」」

聞こえたのは弾が的に当たった音だけだ。銃撃の音は聞こえない

「おいカレン〜何をした？」

「綴先生だけ…キンジ君も見せてあげるね〜。…」

まただ。

あの無機質な白黒の時間が見える。

「これは…なんだ？」

綴先生も声が堅い

「時間を停止させているんですよ〜」

「なんだって!？」

「じゃああの時計を見てください」

「なんっ!」

時間は確かに動いていない。

「この時間で撃てば音も聞こえずに急に着弾しているように思えるんですよ。じゃあ綴先生、蘭豹先生の横に移動してみてください。」

「何でえ〜?」

「もし時間が止まっているのなら急に移動してきた綴先生に驚くはずですから」

「ん〜?確かにねえ〜」

綴先生が歩いていく。

「キンジ君!今銃撃をしてみてください」

「ん?」

「とても面白いよ〜!何回でも撃てるからね〜」

「あつ、ああ、やってみる」

バンバン

俺が撃つと確かに音がする。

だが、着弾する直前で止まっている。

試しに12発すべて撃ってみる。

「じゃあ綴先生!横に来ましたか?」

「来たよお〜」

「じゃあ時間を動かすね〜」

ダンダンダン

着弾するのが見えるが発砲音は聞こえなかったようだ。

「綴!?!」

「おおー蘭ちゃん〜」

綴先生もびっくりしているようだ。

「こんなことが出来るんですよ〜。これでいいですか?」

「良いよお〜」

「それじゃあ私は戻りますね。キンジ君行こ!」

「あつ、ああ」

俺たちは外へ出て行った

第十八話 お買い物

「キンジ君行こ〜!」

「どこへだよ?」

「それは…お買い物だよ〜!」

「はあ?なんで女子と二人で…」

「貸し」

「うぐっ!」

返す言葉もないようだ

「じゃあ決まりだね〜!ここに一時間後に集合だよ!」

「…分かった」

キンジ side

「キンジ君行こ〜!」

「どこへだよ?」

俺が女と一緒に行動するなんてことは無いんだからな

「それは…お買い物だよ〜!」

「はあ?なんで女子と二人で…」

「貸し」

「うぐっ!」

そ、そうだった。ハイジャックの時の貸しがあったんだ

「じゃあ決まりだね〜!ここに一時間後に集合だよ!」

「…分かった」

これは仕方ないことなんだ。

そこらへんで時間を潰そう。

一時間後…

「おまたせ〜!」

「っ!」

「どうしたの?」

カレンの服装は…いつもとは違ったヒラヒラしたフリルの付いたスカートだった

いつものギャップからついそちらを見てしまった。

その視線に気づいたか

「キンジ君?どうしたの?私の服装変だった?」

首をかしげながら聞いてくる。

「い、いや何も問題ないぞ」

「そっかく!良かった」だきつ

「お、おい!」

「?どうしたの?」

「?じゃねーよ!こちとらヒスらないかヒヤヒヤしたぞ

「と、とりあえず行くか」

「そうだね〜!」

二人移動中

「そっかいやーどこ行くんだ?」

「ん?秋葉原だよ〜!」

「理子が喜びそうだな」

「だね〜!」

…秋葉原

「キンジ君!」

「なんだよ?」

「秋葉原だよ〜!」

「秋葉原だからな」

「も〜!ノリが悪いな〜!」

カレン買い物中

買い物後

「おまたせ〜!」

「ああ」

「おなかすかない?」

「確かにな」

「じゃあその辺のレストランにでも行こ〜!」

「そうだな」

移動中

とあるレストラン

「キンジ君何にする?」

「俺はハンバーグにでもするよ」

「じゃあ私もそれで〜!」

「お待たせしました。ハンバーグです」

「わああ! キンジ君たべよう! はい、あーん」

「っ! 何やってるんだ!?!」

「私が食べさせてあげる! 今日のお礼だよ!」

「いや、俺自発的に食ってるし」

「良いからいいから〜!」

「きよ、今日だけだぞ!」

「は〜い! じゃあ、あーん!」

俺は誰も見てないことを確認してから

ぱく

「えへへ〜! じゃあ私もやって〜!」

「なんでだよ!」

「キンジ君に食べさせてほしいから!」

なんなんだよ!

「お願い〜!」

と上目づかいでこっちを見てくる。

お、おい! こっちに迫ってくるから制服の中が見えそうなんだよ!

「わ、分かったよ」

「やったり〜!」

「じゃ、じゃあ、俺がやるから」

「は〜い!」

俺がフォークを出すとカレンの口の近くに持って行った。

カレンは

ぱく

と食べて

「おいしい〜! キンジ君が食べさせてくれたからもっとおいしい!」

「お、おい! 大きい声で話すな!」

「?」

「キンジだ！」

「ほんとだ！カレンちゃんという！」

「何でキンジだけなんだ！」

「カレンちゃんくハアハア」

なんなの最後の人！怖いよ！寒気もしてきた！

「キンジ君！なんか怖いよ！」

「それはお前のせいだ」

「え！!?何で？」

「そんなに大きな声で話すからみんなの注目を引いてしまっているんだ」

「そうなんだ、ごめんね！」

「いや、もう俺の評価はもともと最悪という感じだから、これ以上下がることはないから大丈夫だ」

「優しいんだね！キンジ君は！」ぎゅっ

「そうゆうことをするからみんなの注目を引くんだ。」

「えー、でも、キンジ君の評価は最悪なんでしょ！これ以上かないなら問題ないじゃん！」

「…それでもだ」

「ふーん…まっいつかく！じゃあ行く！」

「そうだな」

一人移動中

「今日はこれでお終いだからね！今日はありがとう！」

「ああ」

「どうする？転移する？」

「いや、今日がいい。歩いていくよ」

「じゃあ私も歩くよ！」

「お前も歩くんだな」

「当たり前でしょ！」

「じゃあ行くか」

「そうだね！」